

人文会 ニュース

jinbunkai news

December 2019

NO. 133

1
15分で読む

生誕250周年を機に、ヘーゲルへの誤解をとく

岡本裕一朗

15
書店現場から

大垣書店 京都本店

—— 京都の書店の新しい取り組み

山田清貴

22
図書館レポート

あま市美和図書館の取り組み

千邑淳子

2019年特約店グループ訪問報告

2019年研修旅行報告

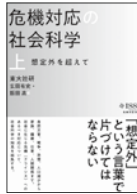


www.jinbunkai.com

危機対応の 社会科学〈上〉 社会科学〈下〉

東大社研・玄田有史・飯田 高
編

自然災害、戦争、恐慌、人口減少から家族、健康、仕事、人間関係まで。社会に生じる危機(クライシス)へのあるべき対応について、社会科学の知見を結集する。



〈上〉4800円+税 〈下〉5000円+税

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

創元社

【図説】

紋章学事典

紋章の成り立ちから独特の用語、デザインの意味まで80のテーマを立てて詳しく解説図版・写真700点超収録!

▼B5判変型・上製・256頁・定価(本体4800円+税)

われらみな食人種

カニバル
——レヴィーストロース随想集

当時の時事問題を構造人類学的に大胆に読み解いた著者晩年の時評論集。80年以上にわたる知的営為が凝縮した最良の入門書。

▼四六判並製・256頁・定価(本体2000円+税)

C・レヴィーストロース【著】
渡辺公三【監訳】／泉克典【訳】

S・スレイター【著】
朝治啓三【監訳】

大阪市中央区淡路町4-3-6

☎ 06-6231-9010 Fax 06-6233-3111

千代田区神田神保町1-2 ☎ 03-6811-0662

阿部大樹・須自秀平【著】
H・S・サリヴァン【著】
禁書扱いされていたサリヴァンの自伝的教科書。遂に刊行!
■5500円+税

水谷修【著】
修壊されゆく
子どもたち
夜回り先生の青少年問題論
昭和・平成の青少年問題の本質を分析、
解決法を示す。 ■1600円+税



子育てに苦しむ 母との心理臨床

EMDR療法による複雑性トラウマからの解放

大河原美以【著】

虐待・トラウマ臨床の真髄を学ぼう。■2000円+税

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <https://nippyo.co.jp>

ビルゲイツ氏 絶賛
世界29カ国語に
翻訳決定

オ리지ン・ ストリー

138億年全史

デイヴィッド・クリスチャン
柴田裕之 訳

われわれはどこから来たのか——

宇宙創成から生命誕生、さらには現代文明まで138億年の歴史を語り尽くすビッグヒストリーの到達点。
2200円

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は表示価格+税

<http://www.chikumashobo.co.jp/>

生誕250周年を機に、ヘーゲルへの誤解をとく

岡本 裕一郎（玉川大学名誉教授）

はじめに

ヘーゲルが生まれたのは1770年なので、2020年には生誕250周年を迎えることになる。この間、ヘーゲル主義の流行が世界的にも何度かあって、研究は当然のことながら活発に行なわれてきた。私事で恐縮だが、私が大学院に入学したとき（70年代中頃）、4名の同期のうち3名までがヘーゲルを専攻していた。今から考えると、信じられない状況だけれど、当時は批判も含めて、ヘーゲル哲学は人気があった。

そんな経緯を考えると、ヘーゲルの哲学はもうほとんど解明しつくされているのではないか——おそら

く、こう思われるに違いない。そこまでは言わなくても、ヘーゲル哲学の基本ぐらいは分かっているはずだ、と予想されるだろう。ところが、信じられないことに、生誕250周年を迎えようとしている今、私たちはヘーゲル哲学をどう理解していいのか、途方に暮れているのだ。たしかに、200年を超える歴史のなかで、ヘーゲル哲学についてはさまざまな解釈が提出されてきた。そのいくつかは、現在では、ヘーゲル哲学の常識のようになっていくつかは、現在では、ヘーゲル哲学の常識のようになっていくものがある。ところが、そうした解釈について、あらためて根拠を尋ねてみると、じっさいにはヘーゲルのテキストには該当部分がないことが多い。

たとえば、ヘーゲル哲学といえは「弁証法」というように、誰でもヘーゲルの弁証法を口にする。数年前、東

京都知事が築地から豊洲に市場を移転するときも、ヘーゲルの「弁証法」が持ち出されていった。そして、通常「弁証法」が語られるとき、「正―反―合」のトリアーデが説明される。しかし、じっさいにはどうか。何と、ヘーゲルのテキストに、「正―反―合」の弁証法を語った箇所がないのである。

こう言うと、「そんな馬鹿な！」と言われるかもしれない。というのも、ヘーゲル哲学を「正―反―合」の弁証法として理解することは、いわば定説のようになってきたからである。しかしながら、「正―反―合」という図式はフィヒテの知識学の定式であり、その上フィヒテはその図式について、弁証法を語っていないのだ。つまり、ヘーゲル哲学を「正―反―合」の弁証法として理解するのは、二重三重にも間違っているわけである。

もともと、ヘーゲルが自分の手で出版した書物では、「弁証法」という概念はあまり使われていない。この例と同じことは、他にもたくさん確認することができる。

言ってみれば、ヘーゲル哲学には、200年以上にわたって誤解に満ちた解釈が厚化粧のように施されてきたのである。そこで、生誕250周年を迎えるには、

今まで何重にもわたって作り出された虚像を振り払って、あらためて最初から理解しなくてはならない。

この論稿では、誤解をすべて取り扱うことはできないので、今まで人口に膾炙した「常識」を、ヘーゲルの主著と言われる『精神現象学』にかぎって若干取り上げて、その問題点をテキストにもとづいて確認しておくことにする。この作業をせずに、厚化粧の上に新たな化粧を重ねることは許されないだろう。これは、そのための第一歩である。

1 「正―反―合」の弁証法はヘーゲルにはない！

ヘーゲルが自分の手で出版した書物は、『精神現象学』、『大論理学』、『エンチクロペディー』、『法の哲学』などであるが、これらは大学で講義するためのテキストとして書かれている。しかし、岩波版のヘーゲル全集を見ると、『歴史哲学』、『哲学史』、『宗教哲学』、『美学』などが入っている。これらは、ヘーゲル自身の書籍というより、聴講者などのノートを使いながら、ヘーゲルの本であるかのように編集されたものだ。昔の全集では、どこ

までがヘーゲルの文章でどれが他人の文章なのか、明確に区別されていなかった。そのため、以前はそうした講義録も含めてヘーゲルの著作とされてきたが、最近ではキスト・クリティークが進展して、そうした講義録をヘーゲル哲学と理解するには注意が必要になっている。

そこで、ヘーゲル自身の思想を考えるには、何よりもまずヘーゲル自身が自分の手で出版した著作に限定して、検討しなくてはならない。このなかで、「正—反—合」の弁証法が語られていたのか、あらためて問題にしよう。それについては、ヘーゲル研究者として著名な加藤尚武氏の次の証言を引いておきたい。

「弁証法」という言葉にはいままでいろいろ誤解があった。ヘーゲル弁証法は正反合の弁証法であるとしてよく教科書に書いてあるが、正反合という用例がヘーゲルの書いたものなかにひとつも存在しないことは、京都大学の酒井修教授が証明しており、世界的にも認められている。(加藤尚武著作集 第4巻 よみがえるヘーゲル哲学』、77〜78頁)

じっさい、「正(テーゼ)—反(アンチテーゼ)—合(ジンテーゼ)」という定式は、フィヒテの知識学が提示したものであって、ヘーゲル自身がこの図式を使って「弁証法(ディアレクティーク)」を語ったことはなかった。しかも、フィヒテが知識学を「正—反—合」の図式で叙述したとき、「弁証法」という概念はいっさい語らなかつたことにも注意しなくてはならない。

しかし、こう言えば、次のような三角形の図式が持ち出され、反論されるかもしれない(図1)。あるいは、高校の教科書のように、もっと具体化して、つぼみと花と

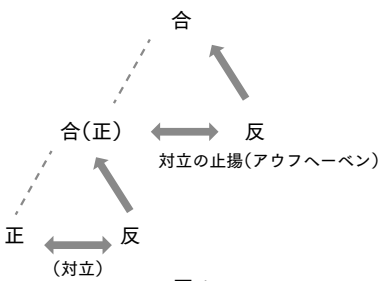


図1

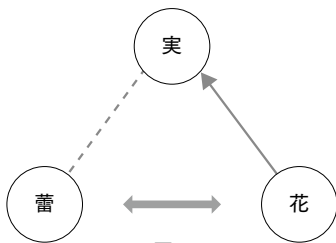


図2

実で説明されるかもしれない(図2)。

そのときの説明が、次の文章である。

ヘーゲルにとって、弁証法を用いて対象が何であるかを認識するということは、基本的に三つの項目からなる思考の過程である。すなわち、ある対象についてのひとつの主張(テーゼThesis)に対して、それと対立して否定する反対の主張(アンチテーゼAntithese)が行なわれる。やがてこれら二つの主張を総合する主張(ジンテーゼSynthese)があらわれて、当初の主張はより高度なものへと「止揚」され、こうして対象が何であるかについてのより詳しく正確な認識がだんだんとあらわれてくる。(中略)弁証法は、たとえばつぼみが消えて花が咲き、花が消えて果実が実るというように、事物が絶えず変化し成長していくという自然の過程のうちに示され(ている)。(村上ほか『高等学校 現代倫理 新訂版 現代の社会をうごかす思想』、140～141頁)

こうした図式は、何となく人を分かった気にさせるかもしれないが、ヘーゲルがこうした図式を使ったことは

一度もない。おそらく、次の箇所を援用して、拡大解釈したものでろう。しかしながら、ここでヘーゲルが「弁証法」も「正―反―合」の図式も使っていないことに注意したい。少し長くなるが、基本的な文章なので引用しておくことにしよう。

つぼみは花卉がひらくと消えてゆく。そこでひとは、つぼみは花卉によって否定されると語ることもできるだろう。おなじように、果実をつうじて花卉は、植物のいつわりの現存在であると宣言される。だから、植物の真のありかたとして、果実が花卉にかわってあらわれるのだ。植物のこれらの形式は、たんにたがいに区別されるばかりではない。それらはまた、相互に両立できないものとして、排除しあっている。しかしこれらの形式には流動的な本性があることで、それらは同時に有機的な統一の契機となって、その統一のなかでくだんの諸形式は、たがいに抗争しあうことがない。そればかりか、一方は他方とおなじように必然的なものとなる。そこで、このようにどの形式も必然的であることこそが、はじめて全体の生命をかたちづくるの

である。(ヘーゲル『精神現象学』上、12、13頁)

あらためて説明するまでもないが、植物の成長過程についてヘーゲルが語るとき、正反合の弁証法は、いっさい使われていないのだ。それにもかかわらず、後年の解釈では、この箇所を正反合の弁証法の典型として提示したわけである。しかも、この誤解が「ヘーゲルの弁証法」として、高校の教科書にまで定説のように説明されている。これは、ぜひとも、是正しなくてはならない。

2 「主人と奴隷の弁証法」はなかった!

「正—反—合」の弁証法と並んで、ヘーゲル哲学としてもう一つ有名な「主人と奴隷の弁証法」なるものを取り上げてみよう。こう言えば、読者のなかには、「あぁー、あの主人と奴隷が逆転するという話ね」と思っ出される方がいるかもしれない。じっさい、『精神現象学』を読んだことがない人でも、「主人と奴隷の弁証法」はよく知っている。

たとえば、『精神現象学』の注釈書として定評のある、

ジャン・イポリットの『精神現象学の生成と構造』において、次のように言われている。

主人と奴隷の弁証法は、おそらく、『現象学』のなかで最も有名な部分であろう。展開の造形的な美しさからいってもそうであるし、また、この弁証法がヘーゲルの後継者たちの政治哲学や社会哲学に(とりわけマルクスに)あたえた影響によってもそうなのである。(イポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』上、229頁以下)

しかし、有名であるからといって、正確に認識されているわけではない。というのも、『精神現象学』のなかで、ヘーゲルはこう言っているからだ。「よく知られている(Bekannt)ことは、だからといって十分に認識されている(erkannt)わけではない」。この警句は、「主人と奴隷の弁証法」にも、きわめてよく当てはまるのだ。

では、一般には、この弁証法はどう理解されているのだろうか。もう一度、イポリットの解釈を見ておこう。

主人と奴隸の弁証法が本質的にしめしていることは、じつは、主人が奴隸の奴隸であり、奴隸が主人の主人であるということである。このことによって、一方的な承認形式の不平等が克服され、その平等が再建されることになる。(同書、230頁)

ここで「主人は奴隸の奴隸である」とか、「奴隸は主人の主人である」とか表現されているのは、何を語っているのだろうか。他の注釈書では、次のように説明されている。

主人はある意味で、つまり彼(主人)が奴隸に頼り、己(主人)の自由を奴隸が奴隸であることに依存しているがゆえに、奴隸の奴隸である。主人であること自身が、奴隸であることに逆転する。そしてそこでヘーゲルは奴隸の身分の逆転もまた示す。(フィンク『ヘーゲル——「精神現象学」の現象学的解釈」、259頁)

ここまで見ると、「主人と奴隸の弁証法」として、どんなことが想定されているか、およそ理解できるはずで

ある。それを簡単に、箇条書き風にまとめておこう。

- ① 「主人と奴隸の弁証法」は『精神現象学』のなかで最も有名な部分である。
- ② 主人は奴隸を支配するが、じつさいには主人は奴隸に依存し、奴隸の奴隸になる。
- ③ 奴隸は主人に隷属するが、じつさいには奴隸は主人を支え、主人の主人となる。
- ④ こうして、主人は奴隸に、奴隸は主人へと立場を逆転する。

このような理解は、じつを言えば、すでに100年以上前には確立していた。哲学史家として著名なクロー・フィッシャーの解説では、その原型がすべて提示されている。今までのまとめとして、読んでいただきたい。

主人であることと奴隸であることとの関係における自己意識の弁証法は、それゆえ二つの側面のそれぞれが互いに自分の逆のものに転じるという結果を生み出す。主人は奴隸が働いてかち得たものを享受し、その

ことによって奴隷に従属するようになる。それに対して、奴隷は物を造形し形成するのであるから、物に対して主人である地位を獲得し、そのことによって主人に対しても主人である地位を獲得する。そしてその結果、ついには全関係が逆転する。すなわち主人は奴隷に依存的になり、奴隷は主人に非依存的となる。道徳的にいえば、主人は自分を奴隷の奴隷とし、奴隷は自分を主人の主人とする。(フィッシャー『ヘーゲルの精神現象学』、144頁)

以上、詳しく「主人と奴隷の弁証法」なるものを描いてきたが、そのどれも基本的には同じストーリーを繰り返している。その意味で、こうした理解は、『精神現象学』に対する常識となっているわけだ。

問題なのは、ヘーゲルがこのストーリーをはたしてじっさいに記述しているのか、ということである。そもそも、「主人と奴隷の弁証法」という表現自体が、『精神現象学』の該当箇所には存在しないのである。今まで、ほとんどの研究者が、「主人と奴隷の弁証法」という表現を使ってきたが、ヘーゲルはそうした「弁証法」を

語っていない。単純な話である。該当箇所に、その表現がないのだ。とすれば、「主人と奴隷の弁証法」というストーリー自体が、勝手に捏造されたものではないだろうか。

誤解のないように、あらかじめ注意しておけば、ヘーゲルが『精神現象学』において、「主人と奴隷」の関係を論じたことは、確かである。ヘーゲルは主人と奴隷のあり方を、「自己意識」と捉え、相互に相手を自己として理解する関係のように記述した。しかし、この関係は、「主人と奴隷の弁証法」としては描かれていないのである。

というのも、主人と奴隷の関係は、主人の奴隷への依存関係として理解されていないからだ。主人が奴隷を支配するとしても、奴隷の労働に依存するとか、奴隷に従属するとか、さらには奴隷の奴隷といった表現は、テキストにはいっさい見当たらないのである。そのため、主人が奴隷に逆転する、あるいは奴隷が主人に逆転する、といった事態にしても、『精神現象学』では起こらない。主人と奴隷の関係について、ヘーゲルがじっさいにどう描いているのか——これについては、ここでは詳細

に示すことができないが、テキスト解釈を離れても、主人と奴隷が逆転しないことは明らかではないだろうか。それを理解するために、簡単に図解しておこう。

ここでは、主人と奴隷が逆転したらどうなるか、考えることにしたい。そうすると、主人は奴隷に、奴隷は主人となるだろう。しかし、こうなったら、再び「主人」

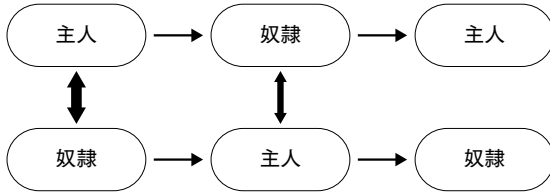


図 3

と「奴隷」の関係が出来上がるにすぎない。そのときは、もう一度、主人と奴隷が逆転するのだろうか。しかし、そうなっても、事態は何も変わらない。つまり、主人と奴隷の関係が永遠と繰り返されるだけだ。こうした同じことが無限に繰り返されることを、ヘーゲルは「悪無限」と呼んで、厳しく批判している（もちろん、ヘーゲルは主人と奴隷の逆転を想定していないので、その逆転を悪無限として批判するわけではない）。

こう考えると、ヘーゲルが『精神現象学』のなかで、主人と奴隷の立場の逆転を語るはずもないことが分かるだろう。そしてじっさい、その表現もないのである。とすれば、『精神現象学』には、いわゆる「主人と奴隷の弁証法」は言葉としても、内容としても存在していない、と言わなくてはならない。

3 『精神現象学』は失敗した著作!?

今度は、『精神現象学』という著作そのものを考えてみよう。この本は、哲学史的にも名著とされ、「世界の50冊の名著」(?)といった企画を立てると、必ず登場す

る常連の作品とも言える。

ところが、名著の誉れ高いこの本を読んでも、ほとんどの人がこれをどう理解してよいのか、当惑するにちがいない。この本は、最初から最後まで読みとおすのに、とても骨が折れるのだ。その一つは、ヘーゲル独特の言葉遣いがあり、しかもその言葉が多義的に使われていて、意味を読みとるのが容易ではないからである。たとえば、「精神」とか「主体」という言葉でも、普通の意味とはかけ離れている。

しかしながら、『精神現象学』の難しさは、そうした読みにくさとは異質のものである。読んでみた印象からすると、書物全体の構成がどうなっているのか、サッパリ分からないのだ。同じことが繰り返し言及されたり、歴史が異なった視点から何度も展開されたりする。本の前半と後半では、論述のスタイルがまったく変わっている。そのため、この本を読み終えると、次のような疑問が必ず湧いてくる。——この著作は、そもそも全体として統一的な構想の下で書かれたのだろうか。もしかしたらヘーゲルは、執筆の途中で初めの構想を変えてしまったのではないだろうか。その結果、『精神現象学』

は、その構成において混乱を生み出すことになったのではないか。

この疑問は、研究者の間ではずいぶん前から指摘されてきたが、一般の読者に向けて紹介されることはほとんどなかった。そのため、『精神現象学』の解説では、最初から統一的な書物という仮説に立って、つじつま合わせのような説明が行なわれてきたのである。しかし、じっさいのところ、この仮説そのものが、怪しいわけである。少し刺激的に表現すれば、『精神現象学』という書物は「失敗を隠すために偽装された著作」と言えるかもしれない。とすれば、『精神現象学』の理解も、すっかり改める必要があるのではないだろうか。しかし、どうすればいいのか。

新しく編集された『精神現象学』を見ると、この問題にもある程度メドがいつてきた。最近の文献学的研究によると、『精神現象学』の最初の構想がどのようなものか、そしてそれが執筆の過程でどのように変えられていったのかが、明らかにされている。ところが、こうした議論は、一般的な解説書にはほとんど反映されず、いまだに旧態依然の説明が行なわれている。しかし、『精

『神現象学』の成立過程を明らかにすれば、今まで行なわれてきた「つじつま合わせのための解釈」に別れを告げることが出来るはずだ。

ここで、『精神現象学』がじつさいにどのような出来上がったのか、について立ち入って考察することはできない。しかし、その問題について、ヘーゲル自身が自覚的だったことを指摘しておくのは、無駄ではないだろう。彼は出来上がったばかりの『精神現象学』を、友人のシェリングに献本しながら、次のような書簡を書き送っている。

私の本がついに出来上がりしました。しかし、友人に献本するさいにも、出版業者や印刷の過程、さらに一部分は構成そのものをも支配したのと同じような、不幸な混乱が生じました。(中略)細部まで深く入り込んでいたので、全体の見通しが悪くなったのは、私も感じています。(中略)また、最後の部分のかなりの大きな不格好も、大目に見てください。何しろ、私が全体の編集を終えたのは、まさにイエナ会戦前の真夜中だったからです。(Hoffmeister, *Briefe von und an Hegel*, Bd. 1,

この手紙で、「構成そのものをも支配したのと同じような、不幸な混乱」というのは、何を意味するのだろうか。その一つは、「二重タイトル問題」として知られている。『精神現象学』は、最初の構想では『意識の経験の学』というタイトルのもとで書き始められ、途中の構想変化に伴って『精神現象学』という名称にかわったのである。これについては当然、なぜ書物のタイトルを変更したのか、また書物のどこで構想変更があったのか、問題になるだろう。

構想の変化を示すもう一つの混乱を確認しておこう。『精神現象学』の目次を見れば分かるように、この著作にはローマ数字による区分と、アルファベットによる区分の二つの篇別構成があるが、この二つが整合的に構成されていないのである。やや煩雑ではあるが、問題をハッキリさせるために、内容目次を示しておこう。

(A) 意識

I. 感覺的確信、このものと私念

II. 知覚、物と錯覚

III. 力と悟性、現象と超感覺的世界

(B) 自己意識

IV. 自己自身の確信の真理

(C) (A A) 理性

V. 理性の確信と真理

(B B) 精神

VI. 精神

(C C) 宗教

VII. 宗教

(D D) 絶対知

VIII. 絶対知

一見して分かるように、この二つの区分は1対1に対応していないし、全体としてアルファベットの区分が不恰好であることは間違いない。(C)全体には表題が欠けているように見えるし、「理性」が全体の表題のようにも見える。しかも奇妙なことは、ページ数がまったくアンバランスであることだ(Meiner社の哲学文庫版で言えば、(A)が51ページ、(B)が37ページ、(C)全体が何

と375ページである)。この事態をどう理解したらいいのか、今まではほとんど説明がつかなかった。

しかし、現在では、文献学的研究によって、こうした奇妙な状況がどうして生じたのか、明らかになっているところが、残念なことに、一般的な解説では十分に活かされることなく、旧態依然のつじつま合わせの解釈が行なわれているのである。そのため、『精神現象学』の理解が、きわめて困難になっているのだ。

おわりに

以上、ここでは『精神現象学』についてだけ簡単に論じてきたが、ヘーゲル生誕250周年を迎えるにあたって、私たちが確認しておくべきは、今までヘーゲルについて語られてきたイメージ(ヘーゲル像)は、ことごとく検討に付されなければならない、ということである。ヘーゲルを理解するためには、あらためてテキストを読み直すことから始めなくてはならない。当たり前のことではあるが、哲学研究はそこから始まり、そこへと帰っていくだろう。

注記

本稿の細かな議論については、拙著『ヘーゲルと現代思想の臨界——ポストモダンのフクロウたち』(ナカニシヤ出版、2009年)を参照頂きたい。

参考文献

- G・W・F・ヘーゲル『精神現象学』上・下(熊野純彦訳)ちくま学芸文庫、2018年
- G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, PNB414, Felix Meiner, 1988
- 加藤尚武『加藤尚武著作集 第4巻 よみがえるヘーゲル哲学』未來社、2019年
- 村上隆夫ほか『高等学校 現代倫理 新訂版 現代の社会をうごかす思想』清水書院、2018年
- J・イポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』上・下(市倉宏祐訳)岩波書店、1972-3年
- E・フィンク『ヘーゲル——「精神現象学」の現象学的解釈』(加藤精司訳)国文社、1987年
- K・フィッシャー『ヘーゲルの精神現象学』(玉井茂・宮本十蔵訳)勁草書房、1991年
- J. Hoffmeister(Hrg.), *Briefe von und an Hegel*, Bd.1, PhB, Felix Meiner, 1969

岡本裕一朗(おかもと ゆういちろう)

1954年福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。

九州大学文学部助手、玉川大学文学部教授を経て、現在、玉川大学名誉教授。西洋の近現代思想を専門とするが、興味関心は幅広く、領域横断的な研究をしている。

著書に、『フランス現代思想史——構造主義からデリダ以後へ』(中公新書)、『思考実験——世界と哲学をつなぐ75問』(12歳からの現代思想)(以上、ちくま新書)、『モノ・サピエンス——物質化・単一化していく人類』(光文社新書)、『ネオ・プラグマティズムとは何か——ポスト分析哲学の新展開』(ヘーゲルと現代思想の臨界——ポストモダンのフクロウたち)『ポストモダンの思想的根拠——9・11と管理社会』(異議あり! 生命・環境倫理学)(以上、ナカニシヤ出版)、『いま世界の哲学者が考えていること』(ダイヤモンド社)、共著に『ヘーゲル入門——最も偉大な哲学に学ぶ』(河出書房新社)、『差異のエチカ』(ナカニシヤ出版)、共訳にトマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと?——とっても短い哲学入門』(昭和堂)などがある。

15分で読む哲学者ヘーゲル・ブックガイド

ヘーゲルのテキスト

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
ちくま学芸文庫	4480097019	精神現象学 上	G. W. F.ヘーゲル著 熊野純彦訳	1,700	2018
ちくま学芸文庫	4480097026	精神現象学 下	G. W. F.ヘーゲル著 熊野純彦訳	1,700	2018
作品社	4861824081	ヘーゲル論理の学1 存在論	G. W. F.ヘーゲル著 山口祐弘訳	6,400	2012
作品社	4861824098	ヘーゲル論理の学2 本質論	G. W. F.ヘーゲル著 山口祐弘訳	5,800	2013
作品社	4861824104	ヘーゲル論理の学3 概念論	G. W. F.ヘーゲル著 山口祐弘訳	6,200	2013
中公クラシックス	4121600189	法の哲学 I	ヘーゲル著 藤野渉・赤沢正敏訳	1,500	2001
中公クラシックス	4121600219	法の哲学 II	ヘーゲル著 藤野渉・赤沢正敏訳	1,500	2001
知泉書館	4862852960	ヘーゲル全集 第11巻 ハイデルベルク・エンツェクロペディー	ヘーゲル著 山口誠一責任編集	9,000	2019
作品社	4861826313	ヘーゲル初期論文集成	G. W. F.ヘーゲル著 村田晋一・吉田達訳	6,800	2017

講義録(最新の資料にもとづく講義録)

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体価格	刊行
法政大学出版局	4588010576	美学講義	G. W. F.ヘーゲル著 寄川条路監訳	4,600	2017
講談社学術文庫	4065133361	世界史の哲学講義 ベルリン1822/23年 上	G. W. F.ヘーゲル著 伊坂青司訳	1,490	2018
講談社学術文庫	4065134696	世界史の哲学講義 ベルリン1822/23年 下	G. W. F.ヘーゲル著 伊坂青司訳	1,260	2018
ミネルヴァ書房	4623078516	ハイデルベルク論理学講義『エンツェクロペディー』「論理学」初版とその講義録	G. W. F.ヘーゲル著 黒崎剛監訳	6,000	2017
文理閣	4892596162	G. W. F.ヘーゲル論理学講義	G. W. F.ヘーゲル筆記 ウト・ラーマイル編 牧野広義ほか訳	4,000	2010
創文社	4423171349	ヘーゲル宗教哲学講義	ヘーゲル著 山崎純訳	5,500	2001
法政大学出版局	4588150517	自然法と国家学講義	G. W. F.ヘーゲル著 高柳良治監訳	8,000	2007

(次ページに続く)

研究書(現在でも重要な研究書)

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
法政大学出版局	4588150746	ヘーゲル講義録研究	オットー・ペゲラー編 寄川条路監訳	3,000	2015
粹出版社	4872620337	ヘーゲル 生涯と著作	ハンス・フリードリヒ・フルダ著 海老澤善一訳	5,200	2013
岩波書店	4000265447	ヘーゲルと近代社会	チャールズ・テイラー著 渡辺義雄訳	品切れ	2000
法政大学出版局	4588009914	ヘーゲルの実践哲学 人倫としての理性的行為者性	ロバート・B.ピビン著 星野勉監訳	5,200	2013
堀之内出版	4909237385	欲望の主体 ヘーゲルと二〇世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義	ジュディス・バトラー著 大河内泰樹ほか訳	4,000	2019
リベルタス出版	4905208013	ヘーゲルの行為概念 現代行為論との対話	ミヒャエル・クヴァンテ著 高田純ほか訳	4,200	2011
みすず書房	4622018942	ヘーゲル伝	カール・ローゼンクランツ著 中埜肇訳	5,500	1983
国文社	4772001697	ヘーゲル読解入門 『精神現象学』を読む	アレクサンドル・コジュエヴ著 上妻精・今野雅方訳	品切れ	1987
岩波書店	4000020244	ヘーゲル精神現象学の生成と構造 上	イポリット著 市倉宏祐訳	品切れ	1972
岩波書店	4000020251	ヘーゲル精神現象学の生成と構造 下	イポリット著 市倉宏祐訳	品切れ	1973
岩波文庫	4003369326	ヘーゲルからニーチェへ 十九世紀思想における革命的断絶 上	レーヴィット著 三島憲一訳	1,440	2015
岩波文庫	4003369333	ヘーゲルからニーチェへ 十九世紀思想における革命的断絶 下	レーヴィット著 三島憲一訳	品切れ	2016

入門書(日本の研究書)

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
東京大学出版会	4130130271	カントからヘーゲルへ 新装版	岩崎武雄著	2,800	2012
中央公論新社	4124035247	哲学の歴史 7 理性の劇場	加藤尚武編	3,400	2007
法政大学出版局	4588150791	ヘーゲル講義録入門	寄川条路編	3,000	2016
ナカニシヤ出版	4779503184	ヘーゲルと現代思想の臨界 ポストモダンのフクロウたち	岡本裕一朗著	2,800	2009
社会評論社	4784518401	ヘーゲル哲学入門	滝口清榮著	1,800	2016

—書店現場から—

大垣書店 京都本店

——京都の書店の新しい取り組み

山田 清貴（大垣書店京都本店）

大垣書店は京都府を中心に商業展開をしている書店チェーンである。ショッピングモールなどの商業施設や、鉄道駅の付近に店舗を構え、「地域に必要とされる書店でありつづけよう」という社是のもと、日々の業務をおこなってきた。

今年（2019年）の3月、われわれ大垣書店は京都の中心的な市街地である四条室町に新たな店舗をオープンさせた。それが私の所属する大垣書店京都本店である。本稿では、大垣書店にとって新たな「本店」であるところの京都本店の立ち位置やコンセプト、またオープンから半年が経過するなかで、スタッフとして私が目にしてきたこと、さらには今まさに課題として直面していることなどについて記していきたい。

京都本店の目指すもの

われわれ京都本店は、これからの書店の「ニュー・スタンダード」となることを目指している。

それは大垣書店という組織のなかでの新たな標準を打ち出していくことはもちろん、京都という街に根差した書店としての新しいあり方を模索するということも念頭に置いている。具体的な取り組みとしては、次のことが挙げられる。

- ・テーマ別、関連性に基づくジャンル横断的な商品陳列。
- ・時間をかけて店内を回遊したくなるような空間の演出。
- ・食品、雑貨などの積極的な取り扱い。
- ・地域住民だけでなく、観光客も対象にした品ぞろえ。
- ・イベントスペースの設置。

まずはこれらの取り組みについての概要を述べていく。

テーマ別の陳列について

京都本店では、「文」、「家」、「商」、「知」、「芸」、「旅」、「雅」、「語」、「京」、というテーマで店内の区画を分け、そのなかでセレクトした商品を並べていく、という方法を採用している。雑誌の陳列でいえば、文芸誌は「文」、ビジネス雑誌は「商」、子育て雑誌や幼年誌は「家」、といった具合に各コーナーに振り分けて陳列し、まとまった「雑誌売り場」は設けない。また文庫に関しても、小説は「文」、雑学系は「家」、学術系は「知」、ビジネス系は「商」といった具合に検品

時に振り分けて品出しをおこなう。それによって売場のテーマごとに関連書籍を集約し、より深い選書ができることを目指している。

お客様の反応に基づき、いくらか修正を加えた部分もある。具体的には、児童書や実用書の売上が予想以上に高かったことを受け、「家」のコーナーを拡大したこと、また語学書におけるターゲットを就活生・社会人に絞り、「語」コーナーをまるごと「商」コーナーに吸収したことなどが挙げられる。このような試行錯誤を通してテーマごとの売場をそれぞれ統一された利便性の高いものにするとともに、そうした各売場を巡って時間を過ごすことが何よりお客様にとって心地良いものになるよう心を砕き、頭を悩ませているのが、われわれ京都本店スタッフの日常である。

土産物としての食品・雑貨

食品や雑貨の取り扱いがあることも京都本店のアピールポイントの一つである。これらの商材は、主に「万」^{よろず}コーナーにおいて展開されている。「万」コーナーは店舗の最前面に位置し、日用使いの文具・雑貨から土産品として好まれる菓子類までをコンパクトに取りそろえた売場となっている。夏からは一か月周期の企画「粋なもん市」をおこない、和雑貨、刺繍、菓子、茶など地元企業の商品販売もおこない、好評を博している。

「万」の商品を土産物として購入されるお客様は、観光客の方々だけでなく、地域の方々も多くおられ、そこには四条烏丸という当店の立地条件の良さが起因しているものと思われる。こう

したお客様にお土産だけではなく本も(あるいは本だけでなくお土産も)というように、当初の目的になかった買い物を追加的にしていただければ理想的である。

海外からのお客様について

また海外からのお客様も非常に多く、そうした方々のニーズを満たすことにもわれわれは取り組んでいかなければならない。日本文化に関する書籍や、谷崎潤一郎や村上春樹などの小説、ナルト、ドラゴンボールなどの漫画に関するお問い合わせを受けることがやはり多い。また意外に多いのが芸術書に関するお問い合わせで、浮世絵や春画、草間彌生の画集、あるいは荒木経惟、森山大道の写真集についてはこれまで何度か聞かれた。(一度だけ粟津潔に関する本はないかと聞かれ、見つけてお渡しすると、非常に喜んでおられたのは印象的だった。)このように多様なお客様のニーズに向かって開かれた棚作りをしていくことは、書店員として悩ましくもあり、楽しくもある。

イベントスペースについて

イベントスペース「催」は、サイン会・トークショーなどの開催時には約三十名分の座席が設けられるスペースで、日常的には写真や芸術品などの展示(販売)スペースとして活用されている。イベント開催時には店頭ポスター、店内放送、HP、ツイッターなどにより事前告知をおこなう、その開催は休日の昼または夕方、というのが基本的な流れとなっている。「催」コーナーに

おいては、作家の先生方をお招きするイベントのほかにも、（書籍を出版された）染め物やお菓子作りの先生方によるワークショップなどさまざまなイベントをおこなっている。そうした催しを通して、本を媒介にして人々が集い、交流する場の提供、ならびにそれを店舗にとって収益化していく仕組みの構築をわれわれは目指している。

人文書の担当者として

以上の取り組みは、われわれ大垣書店としてはどれも新しい挑戦である。日々あふれてくるさまざまな課題に対処するなかで、何を保持し、何を変化させるか。それは店舗全体のレベルにおいて、われわれが常に迫られている選択である。しかしながら、まず何よりも各々の売場においてどんな商品（本）を仕入れ、どう並べ、どう売っていくかという意味で微小な選択こそが、書店員として、売場担当者として向き合っていくべき一番の問題である。本稿の残りの部分では、私の担当している人文書の棚作りの現状と課題について述べていく。

京都本店において人文書は主に「知」のコーナーに収められている。「知」のコーナーは人文書＋理工書（＋新書・選書＋学術文庫）という趣の売場だ。当初の計画としてはハードカバーの学術書のあいだに文庫が差さっているというような、全ての本を並列に扱う陳列を目指していた。しかし現在では新書棚、選書棚、学術文庫棚を設け、切り離して展開している。これは第一に、棚の展開方法を明確で簡素なものとし、品出しを誰でも迅速かつ効率的におこなえるようにするた

め、また第二に、「岩波文庫やちくま学芸文庫や講談社学術文庫はどこに置いているのか」というお客様からの声を考慮するため、という二つの理由から導いた決定である。とはいえ、私自身はこの現状に満足していない。スタッフが運用しやすく、お客様にとっても見やすい売場にすることは大前提であるが、お客様と本との予想外の出会いを演出するような棚作りを諦めるつもりはない。

私が目指している理想の人文書棚は、使い古されたイメージではあるが、ストーリーを感じさせる棚だ。ある本の隣に、その次に読むべき本や、それと合わせて読むと面白い本が並び、その数珠つなぎが棚の左上から右下まで続くような棚作りがしたい。とはいえ、あれもこれも、というような網羅的な棚作りが不可能なのは言うまでもない。そうしたなかで魅力的な棚に作れるかどうかは担当者の腕の見せ所である。当店の限られた棚数のなかで本と本の緊密な連関を生み出すとすれば、文庫や新書なども織り交ぜながら棚作りしていくことも考慮に入れねばならない。なぜなら文庫や新書には接着剤やアクセントとして機能するような本がたくさんあるからだ。専門書・学術書の魅力を補完し、あるいは際立たせるためにも、そうしたアクセントは有効だと考えている。もちろん、日々入ってくる新刊書籍を組み込みながら、手作りのクオリティを維持していくのは難しい。それをどう実現していくかは今後の課題である。

棚作りをする上での悩みは当分尽きそうにない。けれども、その日できる自分にベストの仕事をし、より良い売場を作るためにああでもない、こうでもないかと手を動かして考えている時間はとても楽しい。

山田 清貴（やまだ きよたか）



筆者近影

あま市美和図書館の取り組み

1 図書館開館です！

朝、新聞受けから運んだ朝刊を新聞架に吊るし、ブックポストの返却本を処理し、書架の本を整え、カウンターを整え、図書館スタッフの開館準備が整った頃、清掃担当のせつちゃん達が図書館の入口から大きな掃除機をよっこらしょと抱えて、手動で入口のガラス扉を開ける。と、同時に図書館の中の空気とロビーの空気が混じる。図書館の朝が始まる。自動扉へ切り替える前、フロアへ声をかける。

「きょうは試験前なのかな？」

「はい、そうです！」

答えが帰ってくる。

ある日曜日の朝、1階ロビーにある図書館入口、自動扉前には、試験勉強のために必ずや席を確保しようと目論む中学生・高校生、絵本の一部がひょっこりのぞいた布袋を抱えた親子連れ、よくお見かけするきつと今朝も、新聞閲覧コーナーへ向かう予定の年配の方、いろんな顔が並んでいる。

開館を知らせるキンコンカンの鐘の音とともに自動扉が開き、

「おはようございます。」

「お待ちせしました。」

いよいよ、図書館開館です。

千邑 淳子（あま市美和図書館）

2 あま市美和図書館

まずは、あま市やこの図書館が設置された背景について簡単に紹介させていただこう。

(1) あま市

あま市は2020年3月に市制10周年を迎える。2010年に海部(あま)郡東部3町であった旧美和町、旧甚目寺町、旧七宝町が合併し、あま市となった。その時に、海部郡の「あま」の音を残したいということで作られた名称である。

あま市のキャッチフレーズは、「人・歴史・自然が綾なす セーフティー共創都市 あま」。

愛知県名古屋市の西北部に位置し、5市(名古屋市、清須市、稲沢市、愛西市、津島市)2町(大治町、蟹江町)に隣接する。市域は東西約7・9キロメートル、南北約7・8キロメートルで、面積は27・49平方キロメートル。このほぼ全域が海抜ゼロメートル地帯で、海部(あま)郡と言われた所以である。

市のホームページには、「広大な濃尾平野とそこを流れる河川の恩恵を受けて、近郊農業を中心に発展してきましたが、近年は名古屋市のベッドタウンとしても発展し、人口は約88000人を擁します。名古屋市の中心部から公共交通機関で約15分という立地条件にありながら、田園風景と住宅地との調和がとれた緑豊かなまちを形成しています」「この地域の歴史は古く、市内からは弥生時代中期の遺跡も発掘されています。そして、市内には寺社や史跡が散在するとともに、甚目寺観音での『節分会』や萱津神社での『香の物祭』、蜂須賀蓮華寺での『二十五菩薩来迎会』など伝統文化が数多く残されています。また、戦国時代に活躍した武将である蜂須賀小六正勝、福島正則をはじめ、7人も大名を輩出した歴史のまちとしても知られています」と紹介されている。

元号が変わり、令和になり、新天皇皇后両陛下があま市七宝アートヴィレッジを訪問されている。つい最近ではアニメ『サザエさん』のオープニングの観光名所紹介の中でテレビに出ている。

幼稚園・保育園・子ども園は合わせて19園、小学校12校、中学校5校、高校2校であり、大学は所在がない。

(2) あま市美和図書館の歴史

1995年に「文化の杜」は、ふれあいの森、あま市文化会館とあま市美和図書館で構成される複合施設として建てられた。鉄筋コンクリート造3階建の1階に図書館はあり、延床面積753・84平方メートル。小学校にある25×15メートルのプールが375平方メートルとすると、その2倍程度の面積である。閉架書庫も入れてその面積は人口からすると少し小さめである。1979年4月の旧美和町の中央公民館竣工に伴い、設置された図書室が始まりであり、その後、建てられたひとつの町の図書館を3町合併後に市の図書館としたものである。

この小さめの図書館は、土・日曜日になれば1日に1000人を超える入館者を迎えることが多い。常連さん達の多くは図書館で借りた本の返却期限日になると、いつものように来館し、返却し、新しい本を選び、「またね」と帰って行かれる。図書館での本の貸出・返却が終わった後、文化の杜での野鳥観察を楽しみにやってくるバードウォッチャーの方もいる。

絵本や紙芝居を選ぶ相談にやってきて、図書館スタッ

フの回答に嬉しそうな顔で布袋に絵本を入れて帰る方。定期的に館内で行われる乳幼児・児童向けのおはなし会に参加するためにいらっしゃる親子。広報紙の「図書館情報」欄から知り、図書館入口にある特別展示を見に来館される方。まだまだここに列記できないほど、いろんな利用スタイルがあるはずだ。

さて、ご来館になる利用者へのサービスとともに、私達が赴くサービスとして、幼稚園・保育園・子ども園への出張読み聞かせとブックスタート出張読み聞かせがある。それぞれに年間延べ2900名、160名程度が参加する。このサービスには図書館ボランティアの力も大いに借りている。

(3) あま市美和図書館が目指すもの

ここ、あま市美和図書館はあま市を中心に昔からの海部(あま)郡一帯に在住・在勤・在学の方が訪れる。年齢層は生まれたばかりの赤ちゃんから90歳代まで多種多様な利用者が来館される。前述のようにこぢんまりした図書館であるため、おはなし会をすれば、館内では大抵の

場所でその声を聞くことができる。老若男女が集まって、それぞれに過ごしているという感じがびったりだ。

筆者は、以前に図書館でも館種の異なる大学図書館に20年近く勤めていたことがある。そこではアクティブラーニングが活かせるラーニングコモンズという新しい場が作られ、図書館の様々な資料を利用しながらもディスカッションやプレゼンテーションも可能なフリースタイルの場が設けられるようになり、学生たちは閲覧机というものから解放され、テーブルとチェアをフレキシブルに組み合わせて、仲間と語り合う空間で生き生きとしていた。

「閲覧室は静かにしましょう」の一点張りではなく、公共図書館にも今、そんな交流の場としての役割が求められているように思う。

最近の公共図書館に多くの人が求めているイメージのひとつとして、アメリカの社会学者オルデンバーグが唱えた「サードプレイス」が頭に浮かぶ。

ところで、ファーストプレイスは第一の居場所である

家、セカンドプレイスは職場や学校など、自宅以外で長い時間過ごす場所、サードプレイスは自宅に帰る前に軽い息抜きができる場所、リフレッシュや新たなやる気を生む交流のある場所と定義されている。

サードプレイスに共通する8か条なるものもある。中立性、社会的平等性の担保、会話が中心に存在する、利便性がある、常連の存在、目立たない、遊び心がある、感情の共有ができるなどだが、以下にもう少し詳しく説明する。

- 1 個人が思いのまま出入りすることができ、もてなすことを要求されず、全員が心地良くとつろぐことができる中立地帯としてある。
- 2 会員等アクセスに制限がなく、誰でも入ることができる。
- 3 会話が中心にあり、活気で満ちている。
- 4 アクセスがしやすく、中にいる人々が協調的である。
- 5 常に新顔を快く受け容れる「常連」がいて、いつも心地良い空気をつくる。
- 6 日常に溶け込む飾り気のない外観(デザイン)をし

ている。

7 明るく遊び場のな雰囲気を持っている。

8 もうひとつのわが家、ぬくもり、家族的な存在である。

など(レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳『サードブレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」みずず書房、2013年)。

言い換えると多様で異質な人々が自分の社会的立場を気にせず気軽に集まり交流できる場と表現できる。リラックスして気軽に交流できるのがサードブレイスの特徴でありメリットといえるだろう。

公共図書館はそのようなサードブレイスの魅力を持ち、かつ、本という、これまた魅力的な素材にあふれている。豊かな情報資源を代表するのは「本」であるが、地域の資料に見られる古文書からパソコンで検索可能な新聞記事などのデータベースまで、そして文字の少ない絵本から文字を読み込む専門書まで、また同じコンテンツでも点字の本・大活字本、さらにLLブック、映像などなど様々なものがある。

その豊かな情報資源と人をつなげ、さらには人と人をつなげる交流の場として、開かれた図書館を目指している。

(4)あま市美和図書館の悩み

カウンターでの手続き中に「なんか、図書館変わった?」「広くなった?」と声がかかる。

夏の終わりに書架が増設されたため、入口から奥へ歩いていく時に、書架が広がってみえるためようだ。そして広がった60センチの幅は、パツパツだった書架にゆとりをもたらし、本が手に取りやすくなっているため、心にゆとりが生まれる。ぐいぐい押し込まなくても、ぐいぐい引つ張らなくてもよい、難儀な一工程がなくなるということは、貸出数や閲覧数の増加にもつながることは想像に難くない。

毎年、3000冊ほどは増加する図書を今後、どう保管・保存するかが一番の悩みである。場所の確保が難しい場合、デジタルコンテンツならばと、公共図書館に電子図書を導入する、あるいはデータベースを導入するには、そのコンテンツが利用者ニーズに合っているのか

という点とコスト面が気になる場所である。コスト面は単館ではなく、複数館でコンソーシアムなどを構築すれば可能なかもしれない。悩みどころだ。

(5) 複合施設の強みを活かす

“文化の杜”として文化会館・図書館は同じ建物の中にあり、複合施設として連携した双方の自主事業をリンクさせやすい環境である。これは強みのひとつだ。

以下にいくつか例をあげたい。

2018年3月に『空想科学読本』の著者である柳田理科雄氏を招いて、文化会館の事業として行った「柳田理科雄サイエンスショー」の開催日前後には「柳田理科雄氏がやってくる！」として、その関連本を70冊近く集めて展示し、その時にはやはりよく貸出がされた。展示されている中で6割強がいつも貸出中という状況。

この秋にはさかなクンならぬ「恐竜くん」を招いてのトークショーとワークショップを行った。図書館入口からすぐの企画展示は「きょうりゅうの本」であった。多くの子どもたちは、恐竜の本なら、絵本も図鑑も読み物

も大好きである。それが、一堂に集まっているのだから、心ときめくのだろう。入館するとすぐに指をさして、お父さん・お母さんに知らせる。であるから、一堂に集まった本は6割方貸出中であった。

このような企画展示のメリットは、利用者の目に留まり、貸出が増えることだけではなく、私たち図書館スタッフにとっても「所蔵が多いとは思ったけれど、集めてみるとこんなにもあるんだ」という再認識と、プラスしてそのテーマの全体像が見えることで資料を補う機会となることである。

また、文化会館の自主事業であるワークショップ「ハーバリウム講座」の開催前後に図書館の特別展示で飾られたハーバリウムの作品を見て、ワークショップに興味を持ち、参加する人もいる。参加後に図書館でハーバリウムの本を借りたり、特別展示を観たり、双方向に利用者が流れる。

文化会館のワークショップ「立体紙切り工作——チラシで昆虫標本を作ろう」に合わせた、図書館の特別展示「紙切りで環境立体工作」も同じような効果をもたら

した。

お互いの利用者への情報提供が相互に行きかうことになる。

文化会館では、貸館事業、または行政の行事も行われる。

昨年度には、先日お亡くなりになった樹木希林さんも出演されたハンセン病をテーマにした映画『あん』の上映と併せた「あま市人権講演会『つたえたいこと——ハンセン病について考えよう』」が開催された。原作者のドリアン助川さんと映画出演者の浅田美代子さんによるトークもあり、大勢の方が集った。「らい予防法」廃止から20年が経過する今、ハンセン病患者に対する医療活動・研究、人権擁護に生涯を尽くした小笠原登氏の功績はあま市の誇りだろう。彼はあま市出身(旧甚目寺町)である。『知らない』を観に行こう——国立療養所菊池恵楓園金陽会作品展」もあま市に相応しい企画の一例である。

毎年、図書館では人権週間の前後には「人権」をテーマにした絵本の企画展示を行っている。この時には「ド

リアン助川さんの本とハンセン病」という企画展示を行った。

今後ともワークショップ、講演の開催を図書館の資料でつなぎ、図書館事業と文化会館事業が双方向に流れるような連携を取り、「文化の杜」を文化と人の交流の場としたい。

3 図書館資料を魅せる

図書館資料は書架に主題により分類され、配架されている。規則的に置かれた状態の書架からひとつまみ、いやひとつかみもふたつかみもして、企画展示のコナーへと狭い館内のあちこちで展開している。

企画展示に選んだ図書はそのテーマに合わせた自家製シールが装備される。間違いなくその場所へ戻せるようである。公共図書館の図書にはコーティングシールが貼られているため、上から自家製シールを貼っても後から問題なく剥がせるのだ。

進行形の企画展示の自家製シールはカウンターに見本

として一覧が置かれ、日々新しい企画展示が展開しているので案内に困らないようにしている。図書館スタッフがお互いの企画を応援しながら、テーマに合った返却本を新たに企画展示へまわしたりする。

(一) 企画展示

文化会館との複合施設であることを活かした企画展示や特別展示については先に述べた通りだ。ここでは図書館の中で運用していくものについて述べたい。

① 瞬発的な企画展示

年間スケジュールで計画的に行う場合と瞬発的に時流にのる場合の概ね2パターンがある。

文学賞は前者にあたる。図書館スタッフがひらめいた場合が後者である。そして、それは「ふくろうのもりコーナー」という決められたコーナーで展開される。こゝは自由に企画を提案し、実施してよい場所であるから、「閃いたら、口に出す↓即、実行」あるのみだ。

例えば、図書館から3分もかからない場所に市の給食センターが新設される、開所が近いとなると、「給食に

ついでの展示をしたいんですよね!」「へえ、給食センター長に連絡しよう!」という流れで始まる。

② 図書館イベントと連携した企画展示

図書館のイベントは文化会館の施設である多目的ホールやアートスペースで行うことが多い。ここに紹介するものもそうである。

講演会開催の広報活動の一環ともなる企画展示は歴史講演会のテーマに即した西郷隆盛についてのものを行った。大河ドラマ放映をきっかけに歴女でなくても、ちょっと手が伸びる。

アフリカの現代ポップアートであるティンガティンガ・アートの挿絵でアフリカ民話を絵本にした作品がある。この本を基に、ティンガティンガ・アートの絵本挿絵と原画展、ワークショップ、物語を語る講演会を行った時には、館内で「アフリカを知ろう!」の企画展示を行った。東アフリカを中心に広がる生活布、カンガ。メッセージが一枚ずつに入っており、身体に巻いたり、ものを包んだりして使う、鮮やかな模様の布を原画とともに展示した。

「館長、これ見つめましたよ!」と、スタッフが素敵なカンガが載った本を探し出してくれた。

『カンガ・コレクション』(織本知英子編、ポレポレオフィス発行、連合出版発売、2006年)を早速、館内の企画展示「アフリカを知る!」コーナーへ。

③そのほか

文化会館イベントと連携した企画展示は、先に述べたような内容に代表される。

また、通年、「読み聞かせおすすめ絵本」のコーナーを設置している。ここは定番なので、いつも利用者が絵本を選ぶ時に立ち寄るところでもあり、図書館スタッフも参考にするところでもある。

いわゆる賞もの、「本屋さん大賞」「芥川賞」「直木賞」等々は利用者が楽しみにしているから外せない。筆者自身は、自分は読みたい本が流通にのっていけば、早く読みたいと思うので即、購入するのだが、予約が多くつくコーナーではある。

他館でも多く実施されている新着コーナーも楽しみにしているっしやる利用者は多い。

これらの企画展示は、蔵書回転率、そして蔵書貸出率がアップするひとつの取り組みである。ひとつの取り組みというのは、図書館が意図的に仕掛けることなく、利用者が自身で自由に気ままに本を選んでほしいとも思いうからだ。

大人対象に図書館の利用教育ということを図書館では実施してはいないが、書架をブラウジングする楽しみ、目的の本の隣にときめく本あり。そんな探し方、というか、出会い方もお勧めしたい。

図書館の書架エリアを区別するときには、児童書・一般書と大きくふたつに分けられることが多い。そして、選書も同様だろう。

今夏、「認知症サポーター」の養成講座を「文化の杜」スタッフが全員受講し、オレンジリングを持てるようになった。利用者を子ども・大人と分けるのではなく、大人と呼ばれる人の中でもサードエイジ、フォースエイジというライフステージがあることも認識した選書が必要であろうと気付かされる。企画展示もしかりである。

図書館の様々な資料はまちの宝である。そして地域の方が持つお宝も見逃せない。その技術や知識なども大切な宝である。言うまでもなく、図書館スタッフは町の宝である。

(1) 地域資料の収集

地域資料の収集は怠ってはならない。なぜなら、時間の経過とともに入手が難しくなるからである。が、それがなかなか難しい。特に、合併する前の資料にそのことがいえる。

ところで、ウェブで何か事柄を検索すると、ヒットしてくる結果の中に、「ウィキペディア」がある。このウィキペディアはご存知の方も多いと思うが、インターネット上で運営する、無料の百科事典サービスであり、専門家でなくても、誰もが新規記事の執筆や既存の記事の編集を無料で行える。これを使って、地域の情報を執筆・編集すれば、ウェブで世界へ発信することができる。

2019年から美和歴史民俗資料館、市民活動団体と共同で「ウィキペディアタウンinあま」としてウィキペディアタウンをスタートさせた。歴史ガイドボランティアさん、市民活動団体「あまの神社仏閣へ行こう！プロジェクト」などの既存のグループに図書館やウィキペディアアン、大学生などが加わり、地域のお祭りへ参加したり、地域の歴史ある場所を巡ったり、その後には地域資料を活用した編集作業を行い、資料の利活用が促進されている。また、住民参加型のデジタルアーカイブともいえる。ウィキペディアタウンを行うことで地域資料への意識が図書館内外に高まっていることを感じる。

そこに、人の交流も生まれており、無理のない継統ができるよう、根っこをしっかりつけたい。前述のあま市紹介で既出の「香の物祭」は日本唯一の漬物の祭りである。そこで現在、漬物関連コーナーを設け、日本唯一のコーナーを目指している。

(2) 魅力あるまちの人々

・特別展示ケース

図書館入口の特別展示ケースはまちの人々のお宝や作

品を飾る場所としても活用される。貴重なコレクションをお持ちいただいたり、有名・無名にかかわらず、前述のようにワークショップの講師であるプロ、あるいはプロ顔負けの技術をお持ちの方の作品をお持ちいただいたり、多くの方にご覧いただける機会となる。

例えば、コレクションされた郷土玩具「干支」、長年帽子作りに取り組む方の帽子作品と帽子作りの道具の展示「作ってたのしむ帽子展」。また、「キミスイ」の言葉でわかるだろうか、住野よる原作『君の臍臓をたべたい』という映画にもなった漫画があるが、あの作画はあま市出身の漫画家、桐原いづみ氏のものである。桐原いづみ氏の原画展を行ったところ、ご自身のSNS発信もあり、県外からもファンが来館された。

特別展示に限らず、そのお宝な才能を披露していただいているワークショップがいくつもある。ひとつ例をあげれば、2年連続で大人気満員御礼のワークショップ「親子で紙ヒコキを飛ばそう!」は参加した休日のお父さんがかっこよくみえる。講師は地元の紙ヒコキ名人とその仲間達。

長い歴史を持つ読書会も存在し、ブックスタートや出張読み聞かせへの参加、定期的なおはなし会を実施するボランティア、図書修理のボランティア、本のクリーニングのボランティアなど、ボランティアのみなさんの力は図書館に活気をもたらしている。

さらにこの4月からは市内の高校へ呼びかけ、高校生ボランティアにも活動してもらっている。10代の若いパワーが頼もしく、その考え方や思いを知る好機でもある。ワークショップとして行う「一日図書館員」や地元中学校からの「職場体験」では、図書館スタッフが見守る中、図書館カウンターで貸出や返却を行ったり、フロアへ出て配架作業をしたり、書架から見つけたお気に入りの本の紹介POPを作成したり、と限られた時間に図書館の内側を楽しんでもらう。この若い魂たちが「読みたい!」と思う本を取り揃えているのか、とても気になるところ。日頃の選書が勝負だなと感じる。

ボランティアグループ「グー・チョコキ・パーのおはなし会」にはキッズ版があり、おはなし会で育ってきた子どもたちが行う、子どもたちの子どもたちによる子どもたちのためのおはなし会というのが年に2回ある。会終

了後のアンケートに「たのしくってたのしくってたのしかった」という言葉を見つけた。これは宝物である。

5 最後に

(3) 図書館スタッフは宝物

当図書館はあま市在住者を中心にした地元スタッフで構成されている。

図書館司書の資格を持っていることや図書館現場での経験は大切なスキルであるが、地域のことをよく知っていることも図書館員には必要なスキルである。地元スタッフは公共図書館の使命でもあるその地域の情報を提供する生き字引。これは一朝一夕には蓄積できないスキルである。

また、児童サービスにおいては、長年この図書館で培われた力がある。経験を重ねたものによる日常的な指導も大きな力になっている。絵本のブックリストも、この度「科学絵本101冊」版ができあがった。読書相談にも積極的に応じ、スタッフ間の技術の伝承もわらべうた、手遊び、紙芝居、絵本の読み聞かせ、パネルシアターなどに関して、自然発生的に、また館内研修として行われている。

図書館の存在する意義はなかなか簡単に数字で表されるものではないと思う。文化的な活動はジワジワと効いてくるものだと思っている。だからこそ、デジタルアーカイブも視野に入れ、まちの貴重なお宝を丁寧に集め、大切に保管し、提供していきたい。開かれた場として、同じ「文化の杜」である文化会館はもとより、他機関と連携することでさらに人々の交流の場になることを願い、成長する有機体”として変化をしていきたい。

2019年特約店グループ訪問報告

愛知・京都方面

報告 西野浩文(勳草書房)

●期日…2019年6月12日(水)～6月14日(金)

●参加メンバー…佐藤信治(大月書店)、志田則幸(紀伊國屋書店)、乙子智(慶應義塾大学出版会)、吉岡聡(春秋社)、西野浩文(勳草書房)

●訪問書店(訪問順)

【愛知】ジュンク堂書店名古屋店、丸善名古屋本店、ジュンク堂書店ロフト名古屋店、ジュンク堂書店名古屋栄店、名古屋大学生協南部生協プラザ、ちくさ正文館書店本店、三省堂書店名古屋本店

【京都】紀伊國屋書店京都営業部、立命館生協ブックセンターふらっと、大垣書店京都本店、ジュンク堂書店京都店、丸善京都本店、大垣書店高野店、恵文社一乗寺店、

京大学生協ショッピングプルネ、同志社生協良心館ブック&ショップ、大垣書店イオンモールKYOTO店

●感想

今回は2017年のグループ訪問以来となる名古屋、そして昨年の研修旅行で訪れた京都を2泊3日の旅程で訪問した。

名古屋は今春、繁華街・栄と名駅の双方で書店に大きな動きがあった。4月に栄のジュンク堂書店ロフト名古屋店がリニューアルし、2フロアから1フロアに縮小。そしてジェイアール名古屋タカシマヤの上階にあった三省堂書店名古屋高島屋店が5月末で閉店した。近年は全国的に、新規店のオープンよりも縮小や閉店の動きが目立つ傾向にあるが、名古屋も例外ではない。

はじめに訪問したジュンク堂書店名古屋店は駅前という立地のよさが強み。昨年後半にコミック売場を新設し、人文書売場も移動した。これまで社会科学の括りだった社会学を人文へ移すなど試行錯誤を重ねている。三省堂

書店名古屋高島屋店の閉店により、ビジネスマン中心だった客層に加え、新たな顧客を増やせるかが注目される。

つぎに栄地区へ。丸善名古屋本店は、近接するジュンク堂書店ロフト名古屋店の縮小に伴い専門書の売上増加に期待がかかる。縮小前のロフト名古屋店に比べると品揃えはやや少ないものの、新刊コーナーに人文書担当者の手書き新刊入荷情報を掲示するなど工夫が感じられた。他方、縮小したロフト名古屋店は人文書の棚も以前の2割弱に。まだリニューアル後の売上傾向をつかみきれない様子だったが、客層は若く、コミックを充実させて差別化を図っている。

栄でいちばん新しいジュンク堂書店名古屋栄店下街に直結し、アクセスのよさが特徴。開店から3年で認知度も高まり、売上も伸びているとのこと。読み物を中心に軽めの書籍がよく売れる傾向にあるようだ。

その後、名古屋大学生協南部生協プラザを訪問した。昨年夏に改装し、書籍売場は約半分になったが、専門書の新刊を充実させて先生方へアピールしているほか、店内の半分に旅行センターを設置し、学生が旅行、留学、

語学研修を相談できるスペースに活用している。少しでも多くの学生に店舗へ足を運んでもらうのが狙いのひとつで、教科書も必修の語学書は店外の特設売場ではなく生協内で販売するなど、来客数を増やす工夫が見られる。小さな積み重ねからもお店の意欲が伝わってきた。

名古屋駅周辺の市況変化の対極で、独自のスタイルにこだわり顧客を獲得しているのが千種区のちくさ正文館書店本店。広いお店ではないが、人文・芸術を中心とした専門書の棚が充実し、担当者の目がしっかりと売場に行き届いていた。

初日の最後に訪れたのは三省堂書店名古屋本店。2016年4月、名古屋駅直結のタカシマヤゲートタワーモールにオープンした。3年経ち、売上も確実に上がっている。名古屋高島屋店が閉店し、名古屋本店に統合されて半月も経っていなかったものの、顧客が順調に流れて客足が増え、売上好調とのこと。栄地区に比べて、名駅の集客力が着実に上がっていると感じた。品揃えを含めた売場の質も、今後はこれまで以上に高いものが求められていくのではないだろうか。

2日目、3日目の訪問地は京都。大型店から新規店、

セレクトショップ、そして大学生協まで、昨年の研修旅行で足をのばせなかったエリアも含め、今回はいろいろなスタイルのお店を行程に組み入れた。

まず訪問したのは、烏丸御池駅からすぐの紀伊國屋書店京都営業部。8名の営業担当者が京都と滋賀の大学を中心にカバーしていて、各担当者に販売状況などを聞かせていただいた。大学ごとに規模や予算、選書や購入にあたっての基準も様々だが、担当者が大学や図書館の特性をよくとらえて販促している印象だった。

つづいて立命館生協ブックセンターふらっとへ。同店は市街地からバスで約30分の衣笠キャンパスにある。大阪いばらきキャンパスへの学部移転に伴う学生数減少などの影響を受け、供給は年々厳しくなっているそうだが、定期的にイベントを企画し、立命館の先生方を講師に招いて店内でトークショーを開催。大学生協でイベントを定期開催している店舗はめずらしく、SNSも積極的に活用しながら、来店者を増やす努力を重ねている。

市街地に戻って、四条室町の京都経済センターに今春開業した商業施設「SUIINA室町」の大垣書店京都本店を訪問。今回訪れた唯一の新規店だ。「知」「旅」

「商」などテーマごとに区画を分けた売場構成が目を引き、外国人観光客が多く訪れる立地のよさを生かして洋書も揃えている。人文書の棚は基本的なジャンル分けとキーワード別の陳列がいいアクセントに。地元客も多いそうで、コンセプトショップでありながら、定番の書籍もきちんと売れるお店になることを期待したい。

四条通に面したジュンク堂書店京都店は訪問時、ビルの入口を改修工事中。京都市の景観政策の一環らしく、町家をイメージした格子状の飾りを取りつけられていた。大垣書店京都本店のオープン後は売上に影響が生じているとのこと。人文書は顧客がついていて堅調というお話だったが、売場の特色を出す意味でも、フェアなどに積極的に取り組んでいる。

河原町通の京都BALに入っている丸善京都本店は、売場面積、在庫数ともに京都最大級。大型店の特性を生かし、昨年、人文会50周年フェアを開催していただいた棚の品揃えだけでなく、専門書の新刊・話題書コーナーも充実していて見やすく、フロアもゆったりしているため、じっくり本を選ぶにはとても快適なお店だ。

3日目は個性的なお店からスタートした。京都大学に

近い左京区エリアの2店である。大垣書店高野店はカフェを併設し、朝早くから夜遅くまで営業しているのが特徴。小さなお店ながら、入口近くの目立つフェア棚を活用し、企画やフェアを絡めて思想や社会学などの話題書を販促し、売上につなげていた。

もう1店の恵文社一乗寺店は「本にまつわるあれこれのセレクトショップ」をキャッチコピーに掲げる、ファンの多い個性派書店の代表格。アンティークショップのような美しい店内は文芸書や芸術書が多くを占めるが、人文書も数多く選書され、出会いや発見を演出する空間に。見ていて飽きず、このお店を目当てに遠方から人が訪れるのも頷ける。

限られたスペースで置ける本の数は少なくても、手に取ってみたいくなる仕掛けや意外性、そしてアイデアを生かしたお店づくり——売場自体は対照的だが、大垣書店高野店と恵文社一乗寺店には学ぶところが多くあった。

その後、京都大学生協ショップルネを訪問。前年の研修旅行では校費利用や教科書購入が減少している要因についてお話を伺った。先生や学生にとって身近で利便性

がいないはずの大学生協も苦戦を強いられる状況は京都大も例外ではないものの、専門書の品揃えは充実し、出版社フェアやジャンルをクロスオーバーしたテーマフェアにも意欲的だ。

つぎは同志社生協良心館ブック&ショップへ。地下鉄烏丸線の今出川駅に直結し、学食やコンビニと隣接していて、今回訪れた大学生協の中でも立地のよさが際立ち、集客力の高さは何よりの強み。そのため、学生・教職員だけでなく一般客も利用し、学外者の組合員もいるそうだ。少子化に伴い大学の定員数が減り、学生は少しずつ減っているとお話だったが、経験豊富な各書籍担当者が熱心に売場づくりに取り組んでいる様子がよく伝わってきた。

最後は京都駅に戻り、大垣書店イオンモールKYOTO店を訪問して3日間をしめくくり。駅から徒歩で行ける距離だが、ショッピングセンター内にあるため、客層も市街地の書店と少し異なり、ファミリー層が中心。市内の大垣書店の中でも専門書が特に充実し、堅実な棚構成で人文書もしっかりお客様がついている印象だ。

ふたつの大都市を訪問し、あわただしい旅程ながら、多くの方々のお話を伺うことができて意義深い3日間になった。お忙しい中、快く時間を割いてくださった書店と生協の皆様にご心よりお礼申し上げます。

北海道方面

報告 登尾純一(平凡社)

● 期日…2019年6月26日(水)～28日(金)

● 参加メンバー…藤井若菜彦(筑摩書房)、登尾純一(平凡社)、朝倉哲哉(法政大学出版社)、青柳英孝(ミネルヴァ書房)

● 訪問書店(訪問順)…北海道大学生協書籍部クラーク店、紀伊國屋書店札幌本店、三省堂書店札幌店、MARUZEN&ジュンク堂書店札幌店、江別蔦屋書店、札幌学院大学生協、北星学園生協、丸善雄松堂札幌営業部、コーチャンフォー美しが丘店、札幌大学生協、コーチャンフォーミュンヘン大橋店、北海学園生協会館店、ダイヤ書房外商部、コーチャンフォー旭川店、ジュンク堂書店旭川店

● 訪問新聞社…北海道新聞社

● 感想

北海道地区には2017年秋の研修旅行以来の訪問で、前回うかがえなかった大学生協、書店、新聞社を加

え3日間の行程となった。

初日は札幌市街地の書店を中心に徒歩で移動となった。最初の訪問先は北海道大学生協書籍部クラーク店。札幌駅から徒歩10分ほど、2階にある店舗はそれほど広くないものの、専門書がきちんと並んでいて、担当のベテラン片岡さんの仕事ぶりがうかがえた。『文化人類学の思考法』刊行にあわせたフェアなど、店舗に合った企画も見受けられた。

次にJRを挟んだ紀伊國屋書店札幌本店にうかがう。人文会50周年フェアを2月に開催していただき、そのお礼を述べる。担当の林下さんに人文図書3目録(哲学・思想「心理」「社会」)の展示状況を確認していただく。会員社である晶文社の「犀の学校へ行こう」フェアも開催されていて人文会とのつながりを改めて感じた。

JR札幌駅の駅ビルである札幌ステラプレイス5階の三省堂書店札幌店に移動。ファッションビルで若い女性客が多いものの、専門書の品揃えも充実している。毎月の人文会からの「自信のオススメ」コーナーを常設していたが、5月から「知の森を歩く 人文書フェア」を開催中で状況を拝見。メインの通路で2か月

間実施という意気込みに感謝を述べる。

札幌駅から地下道を通り道新で知られる北海道新聞社文化部へ。高島編集委員と久才記者のお話では書評のメインページと広告は東京支社扱いなので、北海道に関するものや著者が地元の本についての紹介、北海道の書店状況などを担当されているという。地元では影響力が大きく、書店店頭で書評の切り抜きを持ってみえるのはほとんど同紙とのこと。

1日目の最後はすすきののMARUZEN&ジュンク堂書店札幌店へ。石原店長みずから棚のチェックをされ、その場で平凡社ライブラリーの商品入れ替えをされる。即実行の姿勢に感心する。人文図書3目録についても展示を確認していただく。

夜はすすきので書店のご担当者様をお招きして懇親会を行い、初日を終えた。

2日目はレンタカーで札幌近郊と周辺部を回る。

ゆったりとした住宅街に突然大きな駐車場が現れ、江別葛屋書店に到着。岡本店長によると敷地内には書籍の他に食品や雑貨を扱う店もあり相乗効果で休日には駐車場が一杯になるそう。2018年11月にオープンし児

童書等の売上が順調に伸びていると、今後に期待したい。

次に同じく江別市内にある札幌学院大学生協にうかがう。美しいキャンパスの奥に店舗があり学園祭前ということにぎやかな雰囲気であった。専門書は図書館の購入比率が大きいよう。新刊返品の逆送(期限切れ)がこのころ多く困っているとうかがう。

札幌市にもどり、北星学園生協を訪問。担当の中島さんは北大生協から異動し2年半ほど。この間専門書の新刊に注力し売上が伸長。教職員の信頼も厚く全国的に厳しいといわれる教科書の売上也伸びているという嬉しい報告も受けた。一同とても明るい気分で午前を終えた。

昼食を挟み、午後は丸善雄松堂札幌営業部へ。全道で8名で回っており主に大学や専門学校(医療看護系)が対象になっている。横山部長から大学図書館は電子書籍の購入が増えていることや、高額なセットものや北海道に關わるものチラシがあれば活用したいとお話をうかがう。

車を進めコーチャンフォー美しが丘店に到着。会議室で玉村執行役員、玉懸マネージャー、斎藤リーダーにこ

対応いただく。会社として「専門書の構築」が今年のテーマになっているので人文会としても協力をしてほしいとのご提案をいただく。まずは美しが丘店から商品チェックを行う方向となる。

6軒目は札幌大学生協へ。本家専務からは大学生協連合会に加盟して3年目でグループの力を活かしたいことや、今年度から保育科が新設されたこともあり、保育や特別支援教育関連の売上が望めることをうかがい今後の動向が気になることに。

コーチャンフォーミュンヘン大橋店では上野マネージャーと吉田リーダーにお会いする。立地としては郊外だが中心地の大型店の影響も受けているとのこと。吉田さんは前月に児童書担当から異動されたばかりということとをうかがい、「人文書のすすめ」を参考にしていたことに。

2日目最後に北海学園生協図書館店に向かうもキャンパスが工事中で車の入構に少々迷う。高校と同じ敷地であり高校生ともすれ違う。ゆったりとした感じのお店でご担当の木村さんにお話をうかがう。

夜は参加者で懇親会を行いジンギスカンをいただく。

3日目、まずはタクシーでダイヤ書房外商部へ。朝のお忙しいところ福田本部長、鞆子部長、片石さんにお話をうかがう。学校図書館からの注文は各校からではなく、石狩教育局からまとめてくるようになり、営業上案内がやりにくくなったとのこと。最後に法政大学関係の仕事もされているということで、朝倉氏がご縁を感じていた。

札幌駅から特急で旭川へ移動。最後の食事を駅前のショッピングセンターでいただき、15分ほど歩いてコーチャンフォー旭川店へ。駅から少々離れているので郊外店のようなつくり。笹原サブマネージャーにご対応いただき。こちらでも新刊委託期間内の逆送が話題になる。白い棚が並ぶ明るい店内であった。

最後にジュンク堂書店旭川店を訪問。中村店長と小松さんにお話をうかがう。かなり遠方からも専門書を求めでの来店があるそうで、期待されていることがうかがえる。人文図書3目録はレジ近くの新刊コーナーにあり早くも活用されていた。

出発前に参加メンバーの変更があり、少々不安があったものの、お天気にも恵まれ無事3日間の行程を終えられた。訪問先の皆様に心よりお礼申し上げます。

徳島・香川・高知方面

報告 水口大介(創元社)

● 期日…2019年6月26日(水)～6月28日(金)

● 参加メンバー…片桐幹夫(晶文社)、森卓巳(青土社)、片山伸治(吉川弘文館)、水口大介(創元社)

● 訪問書店(訪問順)

【徳島】 附家書店松茂店、紀伊國屋書店徳島店、紀伊國屋書店ゆめタウン徳島店

【香川】 宮脇書店総本店、ジュンク堂書店高松店、本屋ルマガンガ、宮脇書店本店、宮脇書店南本店、紀伊國屋書店丸亀店

【高知】 高知蔦屋書店、金高堂本店、金高堂外商センター、高知大学生協朝倉イクスショップ、金高堂朝倉ブックセンター

● 訪問新聞社…高知新聞社

● 訪問図書館…オーテピア高知図書館

●感想

今回訪問した地区は5年前の2014年にほぼ同じルートで訪問している。この間に新しくできたお店、移転したお店、そしてなくなったお店と、時の移り変わりを感じさせるが、そんななか地域に根付いたお店の強さも感じられた3日間の研修となった。

初日、まず徳島空港に降り立ちレンタカーで附家書店松茂店へ。5年前にも訪問しているが、そのときの取次は大洋社で現在はトーハン。平日の開店直後だったがレジにはお客さんが途切れることがない。近隣の学校の先生などがよくいらっしやるとのこと。次は紀伊國屋書店徳島店へ。徳島市内で専門書といえ、やはりこちらが充実している。長く通われているお客さんが多い。徳島は医学系の学会も多く、出張販売にも出向かれるとのこと。昼食後に紀伊國屋書店ゆめタウン徳島店へ。専門書のなかでは教育書がよく売れる。郊外のSC内ということもありお客さんはファミリー層が中心。徳島を後にして香川県へ。最初に訪れたのは宮脇書店総本店。圧倒的な在庫量を誇る宮脇書店の基幹店舗。専門書の在庫も充実している。ほとんどの人文会会員社にとって四国で

最も売上の高いお店だ。次にジュンク堂書店高松店へ。ことでん瓦町駅に直結した駅ビル内店舗。2015年に開店したが、今年の3月に同じビルの7階から3階に移転。売り場は2割弱小さくなったが、駅の乗降客にとって利便性が高くなったこともあり売上はそこまで変化せず、新しいお客さんも増えたとのこと。ジュンク堂書店らしく専門書は充実している。担当者の方は専門書を扱ってまだ日が浅いとのこと。ミニ研修会を実施。初日最後は本屋ルスガンガ。アポなしの訪問だったが温かく迎えていただいた。店主のセレクトによる個性的な品揃え。著者イベントや読書会なども頻繁に実施して独自のコミュニティを作り上げている。

翌日は開店直後の宮脇書店本店からスタート。高松市内中心部にある同店。お店のたたずまい・品揃えともにお客さんに変わらぬ安心感を与えている。5年前の訪問時に近隣にあった紀伊國屋書店高松店は2年前に閉店。現在はジュンク堂書店高松店を迎え撃つ。次に宮脇書店南本店へ。ここは人文会としては初訪問。大きな駐車場を備えた郊外店。平日の午前中だったが店内ではたくさんのお客さんがお目当ての本を探していた。同店では人

文会の発行している新刊案内を品揃えに活用していただいていた。我々の活動がお店の役に立っていることを実感できた貴重な機会だった。次は紀伊國屋書店丸亀店へ。郊外のSCゆめタウン丸亀内のお店。同店はオーブン時から専門書を重視した品揃えに定評がある。棚だけでなくフェアなども活用しながら専門書の販売を行っている。昼食後、このときちょうど接近していた台風を避けるように香川県を後にして高知県へ。高知県へ入りまず昨年12月にオープンした高知蔦屋書店へ。蔦屋書店を中核にした複合施設で子育て支援センターやキッズスペースなどもあり親子連れを中心に賑わっている。書店としては提案型の棚づくりで、多様なフェアや豊富なPOPやプレートなどでアピールしている。施設にはお客さんがたくさん来ているが書店としての認知度はまだまだこれからとのこと。高知市中心部へ移動し、金高堂本店へ。多層階の旧本店から1フロアの新店には人文会として初訪問。お店を入るとすぐに大きなフェア台があり、今何がおすすめのかがすぐわかる。それ以外にも何をどう売りたいのかきっちりアピールできている店づくりがされている。お店のあいさつもそそ

こにオーテピアの会議室へ。今回の訪問の大事な仕事の一つである打ち合わせへ。8月から10月までの3か月間、本店・朝倉ブックセンター・外商センターと連動した大規模な人文書フェアを実施することが決まりその打ち合わせを行う。営業中の忙しい時間にもかかわらず、関係する部署のスタッフ、また本店と隣接するオーテピア高知図書館の方にもご参加いただき貴重な意見をいただく。本を販売するということもそうだが、読者の方に普段目にするのではない専門書にどう興味を持っていただくか考えることは山ほどあり、ここで出た意見が実際のフェアの中でも生かされることになった。打ち合わせ終了後、金高堂外商センターを訪問。高知県内全域をカバーする同外商センターを通じてどうやって専門書を読者へ届けることができるか意見交換。今度のフェアをきっかけに新しい取り組みにもつながっていききたい。

最終日、まずは高知新聞社へ。学芸部の方々と情報交換を行う。情報経路がネットへ移っているが地域の読者と密接に結びついている地元紙は有力な情報媒体。書評や広告などまだまだ効果が見込める。次はオーテピア高知図書館を訪問。昨年8月に開業した同館は高知県立図

書館と高知市民図書館本館が共同で運営する全国でも珍しい図書館。県立図書館の方にここに至る経緯など教えていただき館内を見学。施設内には図書館だけでなく高知みらい科学館もあり、この日も小学生が授業の一環で来館していた。周辺には高知城歴史博物館などもあり、市内中心部にこのような施設がまとまってあるのはうらやましい限りだ。午後は高知大学生協朝倉イクスジョップへ。各地の大学生協は専門書の有力な販売先の一つ。こちらの生協でも研究分野に対応する分野の新刊はきちんと棚に並んでいた。書籍を購入するのは主に先生。出版社から送られてくる新刊案内を研究室にポストイングも行っている。最後の訪問先は金高堂朝倉ブックセンター。教育書を中心に専門書は充実している。この8月に外商センターが隣の建物に移転してくることが決まっている。今後は外商センターとどう連携していくかが課題だ。

今回の訪問ではナショナルチェーンや地元の老舗、新規の個人開業店など様々なタイプの書店にお邪魔することができた。訪問したお店の皆さんの日々の努力によって地域の読書文化が維持されていることが伝わってくる

濃密な3日間だった。高知の金高堂では人文会としても大きな試みとなる地方都市での専門書のフェアを実施する。この報告が掲載される人文会ニュースが発行されるときにはすでにフェアは終了しているが、このフェアが新しい読者との接点となってくれることを期待している(そして売上という形で結果が残ればなお良い)。専門書は発行部数も少なく、読者対象となる研究者・学生も都市部に集中している。さらにネット書店での販売が大きく伸びている現在、全国各地の書店に本を置いてもらうことは現実的に不可能といっている。そうしたなかで行う今回の取り組みが読者と書店、そして出版社をつなげるきっかけになればと思う。

最後に月末のお忙しい時間に我々の訪問を快く受け入れていただいたすべての皆様に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

大阪・兵庫方面

報告 平石修(御茶の水書房)

● 期日…2019年7月3日(水)～5日(金)

● 参加メンバー…澤畑壘(東京大学出版会)・五月女公(日本評論社)・岩野忠昭(白水社)・田崎洋幸(みすず書房)・平石修(御茶の水書房)

● 訪問書店(訪問順)

【大阪】MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店、紀伊國屋書店梅田本店、紀伊國屋書店グランフロント大阪店、ジュンク堂書店大阪本店、ジュンク堂書店難波店、梅田葛屋書店、紀伊國屋書店天王寺ミオ店、ジュンク堂書店近鉄あべのハルカス店、関西大学生協書籍店、大阪大学生協書籍豊中店

【兵庫】ジュンク堂書店三宮店、ジュンク堂書店三宮駅前店、ブックファースト阪急西宮ガーデンズ店、ジュンク堂書店西宮店

● 訪問図書館…武庫川女子大学附属図書館

● 感想

出版業界の売上は1996年をピークに年々下降している。背景としてはインターネットの普及による若者の「活字離れ」が指摘されるが、コトはそう単純ではない気がする。しかしながら現在の出版社の状況は、その手の議論をする余裕はなく、1冊でも多く売るための販売活動であるとの認識で、人文会は特約店訪問を続けている。以下、大阪と兵庫の書店現況報告である。

全国的に書店業を展開している、MARUZEN&ジュンク堂書店と紀伊國屋書店を中心に報告する。

ジュンク堂書店系のお店は、梅田店、大阪本店、難波店、近鉄あべのハルカス店、三宮店、三宮駅前店、西宮店の7店舗を訪問した。どのお店も「重厚長大」な品揃えは変わらないが、改装を期に棚の削減やジャンルの見直しが行われているのが現実だ。トークイベントを積極的に行っている難波店は今年10周年を迎えた。背の高い棚が有名なジュンク堂書店だがここは特に高かった。しかし今は高さを抑えたり、棚を少しずらして平台を置ける空間を作ったりしている。総在庫量の削減などと勘ぐっているのは私だけ？ 平台ではミニフェアの開

催を常時行っていく計画だそう。昨年の研修旅行でも訪問している大阪本店は質・量ともに問題のないお店なのに、売上が維持できないのはなぜなのでしょうかと小笠原書店長のストリートな質問に一同一瞬フリーズした。丸善150周年フェアを開催していたのを見て、改めて両書店が合併した同系列の書店なのだと認識し、柄にもなく少し寂しさを感じた。売場面積2062坪のMARUZEN&ジュンク堂書店梅田店はさすが旗艦店の貫禄がある。お客さんがいろいろ書店を回って最後にここに来て「あったー」と言う場面を見るのが好きだと語る、ちょっとサド的趣向の人文担当の日野雅文さん。「売れるものをたくさん売って、一見売れそうにないものが売れる店舗」を目標としているそう。30代から60代までの人を客層として持つお店。やっぱりすごい。2013年に開店して1週間後に訪問した近鉄あべのハルカス店は、窮屈そうなお店の印象を受けたが、今回の店舗改装により大きく変貌した。中央集中レジになり、店全体が見渡せて明るいお店になった。客層はお金に余裕のあるシルバー層なので、棚のメンテナンスをきちんと継続すれば売上は伸びると私は確信した。三宮駅

前店は3年前の6月の改装で7階のみに縮小。客層は若い人が増えて、人文系よりビジネス系が売れるとのこと。「ヤバイよ」「でも近くの三宮店は田川さんがいるから心強いです」。人文担当の谷口陽子さんと昼食をとりながらいろいろお話聞いた。店内改装で棚を少し減らしたが売上は伸ばしたそう。三宮店は、人文書・専門書という読者に支えられている感じがする。三宮店ファンに答えられるよう商品知識のアップが課題です、との谷口発言は頼もしい。西宮店は学参の売上が大変良いお店だと仕入担当の植田さんが話していた。家族連れの土日型のお店だが、最近は大学を定年退職した元大学教授が来店しているそうだ。

紀伊國屋書店は、梅田本店、グランフロント大阪店、天王寺ミオ店、武庫川女子大学紀伊國屋ブックセンターの4店舗を訪問した。梅田本店は人文会創立の翌年、1969年に開店して今年で50年になる。梅田本店次長の百々典孝さんは、人文書の棚面積と売上占有率はターミナル駅中の他のお店と比較して高くはないが、品揃えと注目書籍の提案には気を配っているとのこと。いつ訪問してもレジの前に人が並んでいる印象が強いお店

で、開店当初は通路が人でいっぱいだった本をレジまで持って行くのが大変だったというウソみたいな話を人文会の先輩に聞いたが、お店を見ているとホントかもしれないと思ったほどお客さんがいた。2013年4月に開店したグランフロント大阪店(930坪)では「人文書というカテゴリーをなくし、一般の人にも人文書の存在を追求することを目標に売場レイアウトを構成した」とのことだが、ハッキリ言ってインパクトが感じられないうお店だった。従来の人文書というジャンルを解体、分散させることで人文書の新しい売り方を提案する試みだが成功したとは言いがたい。天王寺ミオ店は今年3月開店の新店。売上は苦戦中、当面客層に合わせながらの棚づくりです、と店長は元気に語っていた。

大学生協は、大阪大学と関西大学の2店舗を訪問した。50坪と100坪のお店で、アマゾンの攻勢にどう対処してよいかわからないとおっしゃっていた大阪大学生協と、おおらかに店舗運営をしている関西大学生協の相違が失礼ながらもしろかった。

ジュンク堂書店と紀伊國屋書店の隙間を狙っているわけではないだろうが、梅田蔦屋書店がユニークだ。レ

イアウトも店の真ん中が喫茶店でその周りに本棚があり、全ジャンルの本を置くのではなく、企画やフェアによって棚づくりをしている。30代から40代のビジネスパーソンをメイン対象に、読者に発見をあたえる人文書を並べたい、とは仕入担当の三砂さんの言葉。売場面積344坪だが興味がわきそうな本が並んでいる。朝7時から夜11時までの開店時間は読者にはうれしいが「書店員の働き方改革」はだいじょうぶか。

最後は、武庫川女子大学附属図書館について。武庫川女子大学は、学生数約1万人を有する国内最大の女子総合大学だ。蔵書冊数約68万冊、年間入館者数約46万人、出版社とのコラボ企画は学生に評判が良いそう。また、卒業後も継続して大学図書館を利用できるため卒業生の利用も増えている。詳しくは、人文会ニュース130号(2018年12月25日発行)「大学図書館に求められる役割——武庫川女子大学附属図書館の取り組みから」川崎安子図書課長の図書館レポートをお読みいただきたい。

以上で大阪・兵庫班の報告を終わります。訪問時間が前後したりして書店の方には大変ご迷惑をおかけしました。お詫びとお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2019年研修旅行報告

香川・高知

藤井 若菜彦(筑摩書房)

五月女 公(日本評論社)

●期日 2019年10月23日(水)～25日(金)

●訪問先

「香川」 宮脇書店南本店、宮脇書店総本店、宮脇書店本店、
店、ジュンク堂書店高松店

「高知」 ゆすはら雲の上の図書館、高知大学生協朝倉イ
クスシヨップ、金高堂本店、金高堂外商センター、金
高堂朝倉ブックセンター、オーテピア高知図書館

人口70万人に満たぬ高知県で、大々的に「1000冊
の人文書フェア」が行われる。その選書を始めたとき、
実はどうなるかと心配をした。どんな人がどのようにし

て何を求めて来るのか。しかも中四国初の規模だとい
う。なんとかして良い結果にしたいと総力を結集して想像を
巡らせたのは、たしか7月のことであった。

入念な準備の様子が伝えられ、並々ならぬ意気込みが
伝わってきた頃には、地元のテレビ広告を打つというこ
とまで聞いて驚く。書店のフェアでそこまでするなんて、
いったい、何が起きているのだろうか？

金高堂朝倉ブックセンターでいよいよ8月3日に始
まったこのフェアは、好調なスタートを見せた。そして
立役者である創元社水口氏からの売上データを受信する
たびに、もやもやしていた気持ちは吹き飛ばされていく
のである。9月になって、金高堂本店にフェア在庫が
そっくりそのまま引越して、フェアが最高潮に盛り上
がりを見せてくる。このしめくくりの頃を狙って訪問す
る今回の人文会秋季研修旅行のスケジュールは、例に
よってもりだくさんである(写真1)。

高知県に関しては今回で51回を数える人文会の秋季研

中西国初!

人文書フェア

総数1000点以上

全高堂 朝倉ブックセンター
8/3～9/16

全高堂 南本店
9/18～10/31

その1ページが君の人生を変える

「読む力」を身につけて「書く力」「考える力」を養おう!
たくさん「本」との出合いはあなたが成長するきっかけになる!

協力 人文会
大井書店 都立の水書房 紀伊國屋書店
藤巻書店 大正堂書店 松屋書店 豊利社 誠文社
丸善 紀伊屋 誠書房 聖文堂書店
日本評論社 日本社 早稲田 法政大学出版局
みすず書房 三栄ワグ書房 自由堂文庫

全高堂 全高堂南本店 TEL.088182210161 全高堂朝倉ブックセンター TEL.08818401363

写真1 中西国初! 1000冊の人文書フェアの告知

10月23日(水曜日)

羽田空港に集合した会員社18社の担当と販売会社様3社の合計21名はそのまま無事に高松空港へと到着し、高知からやってきたときでん交通の大型観光バスに乗り込む。初日午後うちに土佐入りする予定なのだ。

高松市街に入り、本日の1店舗目、宮脇書店南本店を訪問する。ところで今回の訪問書店はほとんどが6月に少数名のグループで訪問しており、例えるならば偵察が済んでいるような状況であったことをお伝えしておく。

南本店は、バスが停められるような駐車場を備えた郊外型大型店舗で、広瀬店長をはじめ歓待いただく。もちろん目を引いたのは手作りの「人文会今月のおすすめ」。大きな店だがメリハリもつけてあって、ボリュームも感じるような品揃えである。旬な話題では「paypayのQRコード決済をグループに先駆けて実験導入していた」。

昼食は讃岐うどん。香川県の人口は高知県より多くて95万人だが、うどんの1人あたり消費量はダントツの1位である。平均的な日本人のざっと2倍のペースで食べていることになる。

美味しいうどんで県民気分となつて、宮脇書店の総本

修旅行としては30年ぶりの訪問となる。ちょうど平成年間が抜けてしまったことになるわけだ。天皇が退位し改元、平成31年がそのまま令和元年となつての10月である。羽田を飛び立つ1週間前の関東地方は激甚災害の指定を受けた台風19号に蹂躪されている。消費税は10%に上がり、テイクアウトは軽減税率8%だとか、世間は騒がしい。列挙するとなかなか激動の中の出動ではある。だが人文会は、人文書の普及と書店店頭における人文書の構築という目的を一途に遂行すべく、この秋も3日間の濃密なスケジュールをこなしてゆくのである。

山、もとい総本店に向かう。幾度来ても不思議な立地だ。港湾のコンテナクレーンが目に入り、倉庫や工場ばかりで、住宅は少ない。駅からの徒歩圏でもない工業団地の中の、観覧車が目印の本屋さんである。

山下店長をはじめご担当のみなさんと組んず解れつ棚について語り合う。四国で一番の品揃えを誇る本棚の確認には時間がかかる。通常の倍の時間を留意して店内を巡回したのち、宮脇書店社長ご本人との懇談の機会を得ることができた。人文会の専門書はぜひ宮脇書店で、との頼もしいお言葉をいただいた。宮脇書店は高松市内に「本店」とつく店舗が3つあって、その3つ目の宮脇書店本店も続けて訪問した。アーケードの中で、ビジネスマンの多い店である。筒井店長と担当の合田さんにお相手いただいた。

高松行脚の最後にジュンク堂書店高松店の様子を見に行った。高崎店長と山下さんがご担当である。地元商店街とのコラボレーションなどの話を聞く。

日が落ちる前に高松をあとにして、バスにて長距離移動。高知のみなさんが待つ懇親会場へと向かう。

高知県は、南国土佐、といったほうが通じるかもしれ

ない。暖流黒潮がもたらす温暖な気候は亜熱帯とも解され、冬に霜が降りることもない。四国入りにあたって我々がはじめに着陸した香川県高松市の気候とは対照的である。香川県は一年を通じて雨が少なく晴れが多い、いわゆる瀬戸内気候である。四国の大地に東西に横たわる、2000メートル級の峻険な山地が気候を南北で寸断するのだ。太平洋上で蓄積された水蒸気である雲は山々によってさえぎられ、雨となって山林に降り尽くしてしまふ。南国土佐はそのおかげで年間降水量が全都道府県中第1位である。その割りを食うように香川県の降水量は42位。古くから干ばつ対策が施された香川県はどうどん県は地図をみると溜め池だらけである。

到着すると、年間雨量の証明のようにさっそく豪雨が迎えてくれた。この夜、金高堂のフェアに関わったほとんどのみなさんとご挨拶することになる。準備期間が長かったので、とうとうお会いできた、という感が強かった。

10月24日(木曜日)

前夜のうちにすっかり土佐の魅力にハマった一行は、

翌朝、降りしきる雨のうえ、標高差を克服し、雲の上に移動したのである。むろん比喻ではあるが、「ゆすはら雲の上の図書館」というのが図書館の名称で、たしかに四国山地の峻険さを体感できる登坂コースであった。内部も写真2のように天井の構築物が度肝を抜くデザイン of 図書館である。構築物の素材は杉で、地元産である。有名建築家ということも注目ポイントだが、郷土資料の充実、当地ご出身の方とのコラボが目を引く展示物など、飽きさせない作りであった。地域の文化サロンとしても機能しているのである。また、ゆるキャラ収集家としてお伝えすべきは雲の上の図書館マスコット「くもっぴー」である。撮影画像は広角カメラでは不気味に写ってしまった。実物をもっとゆるい(写真2)。

ちなみに高知県の公式キャラクターはカツオではなく、「くろしおくん」だ。これはもうはつきりとしたゆるキャラである。続けて香川県のキャラクターもご紹介したいところではあるのだが、公式にはまだいない。候補は複数で、すべてうどんキャラクターである。讃岐うどんの商標関連の話題はいつも国民的な心配ごとの一つとなっているので、時を待ちたいと思う。

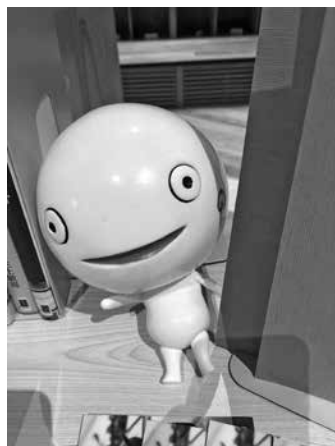


写真2 雲の上の図書館内部構造物とくもっぴー

山地から下り、高知大学生協朝倉イクスショップを訪問。ちょうど昼時のため、学生と雨傘がごった返すなか、川口さんにご対応いただき。新刊のコーナーがジャンル分けされて一列になっている。川口さんのできるだけでなく本と出会う機会を作りたいとの言葉に期待したい。

午後は、いよいよ金高堂本店における中四国初「1000冊の人文書フェア」の視察である。

ここでは、フェアの総括から人文書販売への情報共有を主眼とした研修会も行われた。研修会では金高堂本店の亥角(いすみ)店長をはじめとしたみなさんに貴重な時間をいただいた(写真3)。

この旅行記は、フェアの総括や講評を行う直接の担当ではないが、ド直球のフェアにシンプルに感動。

店舗側の主導で、書店員のみなさんがとても熱心である。開催中の来店客に対する注意も維持していてフェア中の商品の手入れも欠かさない。版元の協力こそあれ、金高堂における手作りの人文書フェアは、地方で書店がしっかり頑張っている素晴らしい例となった。

木の葉をくわえ、本を頭に載せた文鳥は「じんぶんちょう」というオリジナルキャラクター(写真1)。人文



写真3 フェア総括 人文書販売から見たもの 研修会風景

とかけ合わせたネーミングからも知れるように、今回のフェアに合わせて生まれたという。ゆるさよりはかわいらしさの色合いが強く、癒やし効果は高そうだ。

10月25日(金曜日)

朝、金高堂の外商センターを訪問する。車両がずらりと並び、外商のメンバーは現在9名おられるという。高知県全域をカバーしているばかりか、まだまだこれから広げていくという。ここでも地元産の木材がよい香りである。

この旅行記の書き出しにご紹介した金高堂朝倉ブックセンターが店舗としては最後の訪問となった。中心街の金高堂の本店が3年前に移転増床してリニューアルした派手な感じと対照的に、いわゆる郊外の地味なお店だが、店内のそこかしこに手作りのお店の態度のようなものが見え隠れしていた。什器にはダイニングテーブルや箆笥をアンティーク風に配置したりしていた。上田店長は今回のフェアをきっかけに人文会と手を取り合っただけで見直したいという。棚の前で人文会のメンバーがミニレクチャーを実施することとなり、意義深いことである。

旅程の最後にオーテピア高知図書館を見学。高知県と高知市の図書が混在するという仕組みを持つ、立派な施設である。見学には90分では足りないほど。併設された「声と点字の図書館」はメインエントランスからダイレクトかつ中央に配置されていて、まさにバリアフリーであった。知られていない障害に対応したメディアの話など、無知を恥じるばかりである。高知県の2つの図書館を見学したわけだが、共通するのはおしゃべり禁止ではないことだった。

空港に向かう前に有名な「ひろめ市場」にて各自で昼食。外商センターの営業マンに教わったお店を選び、カツオのたたきを思い残すことがなくらい食べてしまった。

21名で強行軍のようなスケジュールをこなす人文会研修旅行であるが、今回も意義深くそして思い出深いものとなった。この研修旅行のために取り組んだあたらしい試みや、ご紹介しきれなかった方々、掲載には向かないエピソードなど、割愛した話題はいくつかある。とりあえず会の活動が前に進んでいくために、この報告がまた何かのきっかけになることを願って、結びとする。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2019年12月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	志田 則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁草書房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房(休会中)		112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	五月女 公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉 哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 片桐幹夫

◎委員長(幹事) ○副委員長

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○森 卓巳・佐藤信治・志田則幸・五月女 公・登尾純一

調査・研修委員会 ◎水口大介 ○片山伸治・西野浩文・澤畑 壘

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・吉岡 聡・藤井若菜彦・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

シークレット・ウォーズ ◆◆

アメリカ、アフガニスタン、パキスタン
三つ巴の諜報戦争

ステイブ・コール 9.11 から米軍主導
の掃討作戦が終結した2014年まで、ア
フガン、パキスタン、アメリカの三つ巴
の攻防を詳細に描いた大作。

笠井亮平訳 各本体 3800円＋税

アフガン諜報戦争 ◆◆

CIAの見えざる闘い ソ連侵攻から9.11前夜まで
ステイブ・コール 公文書と証言から
緻密に再現し検証。ピューリツァー賞受賞！
木村一浩、伊藤力司、坂井定雄訳

各本体 3200円＋税

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448

人気シリーズ《中世から近世へ》の最新刊
徳川家康の神格化
野村玄
新たな遺言の発見
神国思想ではなく仏国思想
を有した天海と秀忠。ふた
りは家康の遺言を受容す
る。だが秀忠没後、天海は自
らの想う仏国創成のため家
康の遺言を改変する。これ
を見た家光の行動は。



四六判・296頁 本体1800円＋税

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp>

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

- 人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円



◆ 哲学・思想図書総目録 2019-2020年版

巻頭特集：書店員が選ぶ哲学・
思想のおすすめ図書30選
〔掲載分野〕哲学・思想一般
／倫理学・人生論／美学／日
本の哲学・思想／アジアの哲
学・思想／中近東・中南米・
アフリカの哲学・思想／西洋
哲学・思想／現代哲学・思想
／宗教一般／宗教学／その他
の宗教／哲学・思想関連雑誌
ISBN978-4-915268-43-4



◆ 心理図書総目録 2019-2020年版

約2500点(99社)収載
〔掲載分野〕心理総論／基礎心
理／発達心理／教育心理／臨
床心理／精神分析／精神医学
／社会心理／その他の心理／
心理関連雑誌
ISBN978-4-915268-44-1



◆ 社会図書総目録 2019-2020年版

約2250点(120社)収載
〔掲載分野〕社会一般／社会学
理論／家族社会／地域社会／
産業労働／福祉・教育／社会
心理・マスコミ／社会問題／
文化文明論／文化人類学／民
俗学／神話・民話／社会関連
雑誌
ISBN978-4-915268-45-8

- ご注文は書店にお願いいたします。

● 人文会

〒113-0033
東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

● 人文図書目録刊行会

〒162-8710
東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)
TEL 03-3266-9521(事務局)

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

《叢書・ユニベルシタス 1097》

ヨーロッパ憲法論

J.ハーバーマース著／三島憲一、速水淑子訳
金融危機、空洞化する民主主義など、かつて戦争を乗り越えて連合を目指したEUが現在直面している問題を、国際法の憲法化や人権の擁護といった観点から論じる。
2800円

《叢書・ユニベルシタス 1100》

ラカン

反哲学3 セミナー 1994-1995

A.パディウ著／原和之訳
反哲学は哲学と全く異なる思考の配置の到来であるような「行為」を引き受ける。現代の反哲学を「締め括る」ラカンは、思考の配置の中でわれわれを何に對して「開く」のか。
3600円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

叢書・知を究める (四六判・上製)

日本人にとって エルサレムとは何か

白杵陽●聖地巡礼の近現代史 明治末から昭和期にかけて聖地エルサレムを訪問した日本人たちの記録から見えてくるアラブの顔と、現代における心象風景の違いとは。*416頁 本体 3200円

ユーラシア・ダイナミズム

西谷公明●大陸の胎動を読み解く地政学 広大な辺の地平ユーラシア。冷戦終焉後の中国とロシアの関係は、海洋国家日本で生きる我々にとっていかなる意味を持つのか。*240頁 本体 2500円

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別

自己責任の時代

その先に構想する、
支えあう福祉国家

キツチンの悪魔

三つ星を越えた男

ホワイト・英国労働者階級出身のシェフが最年少で三つ星を獲得までの波瀾万丈とその後。レシビ付。千葉敏生訳 3000円

続・世界文学論集

クツツエー 最高の読み手でもある作家が、ゲーテの古典から現代のナイポールまで十八人を批評 田尻芳樹訳 5000円

破滅者

ヘルンハルト・G・グールドを主人公にした「破滅者」と「イトゲンシユタインの甥」の二編収録。岩下真好訳 5000円

核軍縮の 現代史

瀬川高史著
1900円

北朝鮮・ ウクライナイラン

どうすれば核兵器を減らせるのか？ 歴史からその方法を探る。



戦後日本の教科書問題

石田雅春著
9000円

日教組と文部省の対立や教科書無償化、家永教科書裁判などの諸問題を、従来とは異なる視点で分析して実態に迫る。

大学アーカイブズの成立と展開

加藤 諭著 公文書管理と国立大学 各大学の事例を挙げ、大学アーカイブズの真の意義や可能性を解明。11500円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2
☎ 03-3813-9151 税別

みすず書房 (税別)

東京本郷2-20-7 <https://www.ms2.co.jp>

情動は こうしてつくられる

脳の隠れた働きと
構成主義的情動理論

リサ・フェルドマン・バレット
高橋 洋 訳

心の謎に迫る新たなパラダイム
英語圏で14万部、13か国で刊行

嬉しいとき、悲しいとき、怒りに震えるとき——人の内部では何がどう動いているのか？ これまでの見方を覆す理論を解説し、情動の仕組みを知ることが私たちの社会生活や健康にもたらす効用を論じる。

▶本体価格 3,200円+税

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業 TEL03(6910)0519

沈みゆく日本では、
命の選別も「仕方ない」のか？

この国の 不寛容の果てに

相模原事件と私たちの時代

雨宮処凛 編著 46判・1600円

内なる植民地主義、
その根深さと克服過程を見つめる

帝国に生きた 少女たち

京城第一公立高等女学校生の
植民地経験

広瀬玲子 著 46判・2500円

東京文京 本郷2-27 大月書店 電話03-3813-4651
otsukishoten.co.jp (税別価格)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

哲学は 環境問題に 使えるのか

——環境プラグマティズムの挑戦

アンドリュー・ライト、エリック・カツツ 編著/
岡本裕一朗・田中弘弘 監訳

現実の環境問題について対処できない、従来の非-人間中心主義的な「環境倫理学」を批判し、プラグマティズムの転回によって新たな地平を切り開いた記念碑的アンソロジー。その後の環境倫理学の議論は本書を抜きに語れない。

◎5,400円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

小作農民の歴史社会学

——「太二日記」に見る暮らしと時代

細谷昂著

A5判 260頁 本体5000円+税

日々の暮らしの中での個人的思いや行動が記録された「日記」に見る社会と時代の背景。

農本主義と農業者意識

——その理念と現実

小林穂著

菊判 442頁 本体11800円+税

これまでの農本主義研究を概観して、そこでの立論を検討していく。「集落営農」政策下、農業者の主體的な起動力に着目した新たな農本思想を展望する。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

天皇と軍隊の近代史

加藤陽子

戦争の本質を掴まえるには何が必要なのか？ 天皇制下の軍隊の在り方の特徴とその変容を描き出す

本体2200円＋税

日本人は右傾化したのか

田辺俊介(編著)

イメージやイデオロギーを排し、大規模な社会調査と統計学から右傾化の虚実を「見える化」する。

本体3000円＋税

植物の生の哲学

混合の形而上学

山内志朗(解説)
エマヌエーレ・コッチャ/嶋崎正樹 訳
山内志朗(解説)
本体3200円＋税

動物学的である西洋哲学の伝統を刷新し、植物を範型とした新しい存在論を提示する哲学エッセイ。

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisosohob.co.jp>

原子力時代 における 哲学

國分功一郎



哲学は、原子力の問題に取り組んできたか？

なぜハイデッガーだけが、原子力の危険性を指摘できたのか。ハイデッガーの知られざるテキスト「放下」を軸に、ハイデッガー、アレントからギリシア哲学まで、技術と自然をめぐる壮大なスケールの考察。

本体価格1800円＋税

重版出来！

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

記憶する体

伊藤亜紗

発売即重版



「その人のその体らしさ」はどのようにして育まれるのか。経験と記憶をテーマに、視覚障害、吃音、麻痺や幻肢痛、認知症などをもつ人の11のエピソードから、ユニークな身体論を展開。読売(11/3) 朝日(11/16) 週刊文春(11/21号)ほか各紙誌絶賛！
定価本体1800円＋税

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384
○web春秋 はるとあき 人気連載更新中!
<https://haruaki.shunjusha.co.jp/> ⇒

トランスレーティッド 高山宏

高山宏の解題新書

定評あるものには見向きもせず、自分は〈未知〉の原石探しに徹しよう。教授の翻訳した、奇異で壮麗なジャンルの如き本棚。 6200円

テレビ越しの東京 松山秀明

戦後首都の遠視法

膨大なアーカイブから戦後のテレビ史を丹念に掘り起し、記憶された〈東京〉なるものかたをたどる。 26000円

分かれ道 ジュテイス・パトラー

ユダヤ性とシオリズム批判

ユダヤ性とは何かを徹底的に主題化して論じ、たがいに手を取りあう「二国民国家創造」の可能性を追求する。 38000円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税別)

2019年12月25日発行 年3回発行 第133号
発行所 人文会
〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内
編集協力 アジュール・プロダクション
印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉